昭和53年３月
久慈市文化財調査報告書第２集

三崎(III)遺跡発掘調査報告書

久慈市教育委員会

三崎(III)遺跡発掘調査報告書
久慈市教育委員会

昭和53年３月
久慈市文化財調査報告書第２集

三崎(III)遺跡発掘調査報告書

久慈市教育委員会

序　　文

三崎地区一帯に縄文期の遺跡が埋蔵されていることは、岩手県教育委員会の埋蔵文化財分布調査において確認され、三崎(Ⅰ)・(Ⅱ)遺跡として保存保護に努めてきたところであります。

ご承知のように三崎地区における住民は海岸部の急峻地に生活の基盤をまもっており、現在でも居住空間は限界に達しております。この度三崎地区民の強い要望の次第もあり、今後地区の開発を考えるとき、この三崎台地以外に余地はなく、遺跡の現況保存は困難であり、緊急に発掘調査を行い先人の文化所産を後世に残す必要があるとの判断から、県教育委員会文化課御当局に協議申し上げたところ、あたたかいご理解をいただき、ここに文化庁の補助事業として昨年９月から緊急発掘調査を実施したものであります。

発掘調査に当っては、県教育委員会文化課長並びに国生尚技師をはじめみなさんのご指導をいただき、担当者千田和文氏（金ケ崎町出身）の献身的なご努力と駒沢大学文学部歴史学科有志のご協力により、３カ月余にわたる本調査を完了し、ここに三崎(Ⅲ)遺跡調査報告書として本書を発刊できる運びとなった次第でございます。

この報告書が当市三崎遺跡地区及び沿岸部一帯における先人が築かれた文化の証しをひもとく史料として、関心を頂く方々の座右の書としてのいささかにでもお役にたてばと念じ発刊に当ってのごあいさつと致します。

1978・3

久慈市教育委員会

教育長　横澤田　喜代治

例　　言

1　本報告は、岩手県久慈市宇部町第19地割192～276番地に所在する三崎(Ⅲ)遺跡発掘調査の結果を収録したものである。

2　調査は久慈市教育委員会が岩手県教育委員会、地元有志、駒沢大学学生の協力を得て実施した。

3　整理作業参加者；中村良幸（大迫町教育委員会埋蔵文化財調査員）・村田良介（駒沢大学大学院）・武田和世子・武田眞理子・田崎美砂子・西谷隆（以上駒沢大学学生）

4　^{14}C年代測定は社団法人日本アイソトープ協会に依頼した。

目　　次

序文

例言

1　調査に至る経過 …… 1

2　周辺の自然環境 …… 3

3　周辺の遺跡 …… 5

4　調査の概要 …… 9

5　層　序 …… 12

6　遺　構 …… 18

7　土　器 …… 30

8　石　器 …… 40

9　まとめ …… 46

10　あとがき …… 49

挿図目次

第1図　三崎半島周辺の遺跡分布図……2
第2図　海岸段丘分布図……3
第3図　表採土器拓影図(1)……6
第4図　表採土器拓影図(2)・表採石器実測図……7
第5図　遺跡地形図……8
第6図　発掘調査区全図……11
第7図　22ラインセクション図……13
第8図　Ⅰラインセクション図……15
第9図　遺構検出位置図……17
第10図　第1号楕円形土壙実測図……18
第11図　第2号・第3号楕円形土壙実測図……20
第12図　第1号長楕円形土壙実測図……21
第13図　第2号・第3号長楕円形土壙実測図……23
第14図　第4号長楕円形土壙実測図……24
第15図　第5号長楕円形土壙実測図……25
第16図　第6号長楕円形土壙実測図……26
第17図　第7号長楕円形土壙実測図……27
第18図　不整形土壙実測図……28
第19図　土器実測図(1)……35
第20図　土器拓影図(1)……36
第21図　土器実測図(2)・土器拓影図(2)……37
第22図　土器実測図(3)・土器拓影図(3)……38
第23図　土器拓影図(4)……39
第24図　石器実測図(1)……42
第25図　石器実測図(2)……43
第26図　石器実測図(3)……44

表目次

第1表　三崎周辺の遺跡一覧表……5
第2表　遺構計測値表……29
第3表　石器計測値一覧表……45

図版目次

図版1　遺跡遠景・遺跡近景（南より）
図版2　遺跡近景（西より）・遺跡近景（東より）
図版3　調査進行状況（北西側・南側）
図版4　Ⅰ－14区石斧出土状況
図版5　遺物出土状況（Ⅰ－16・Ⅰ－27）
図版6　遺物出土状況（K－12・K－16）
図版7　遺物出土状況（H－15・S－7）
図版8　第1号・第2号楕円形土壙
図版9　第3号楕円形土壙、第1号長楕円形土壙
図版10　第2号長楕円形土壙、第2号長楕円形土壙炭化材出土状況（第4層）
図版11　第3号・第4号長楕円形土壙、第4号長楕円形土壙断面
図版12　第5号長楕円形土壙確認面、第5号長楕円形土壙、遺構検出状態
図版13　作業状況、第6号長楕円形土壙
図版14　第7号長楕円形土壙、不整形土壙
図版15　遺構全景
図版16　出土遺物(1)土器
図版17　出土遺物(2)土器
図版18　出土遺物(3)土器
図版19　出土遺物(4)土器
図版20　出土遺物(5)土器
図版21　出土遺物(6)石器
図版22　出土遺物(7)石器
図版23　出土遺物(8)石器

1．調査に至る経過

三崎台地一帯に縄文期の遺跡が埋蔵されていることは、昭和47年度に岩手県教育委員会が実施した埋蔵文化財分布調査において確認され、三崎(Ⅰ)・(Ⅱ)遺跡として、その保存保護に努めてきたところである。

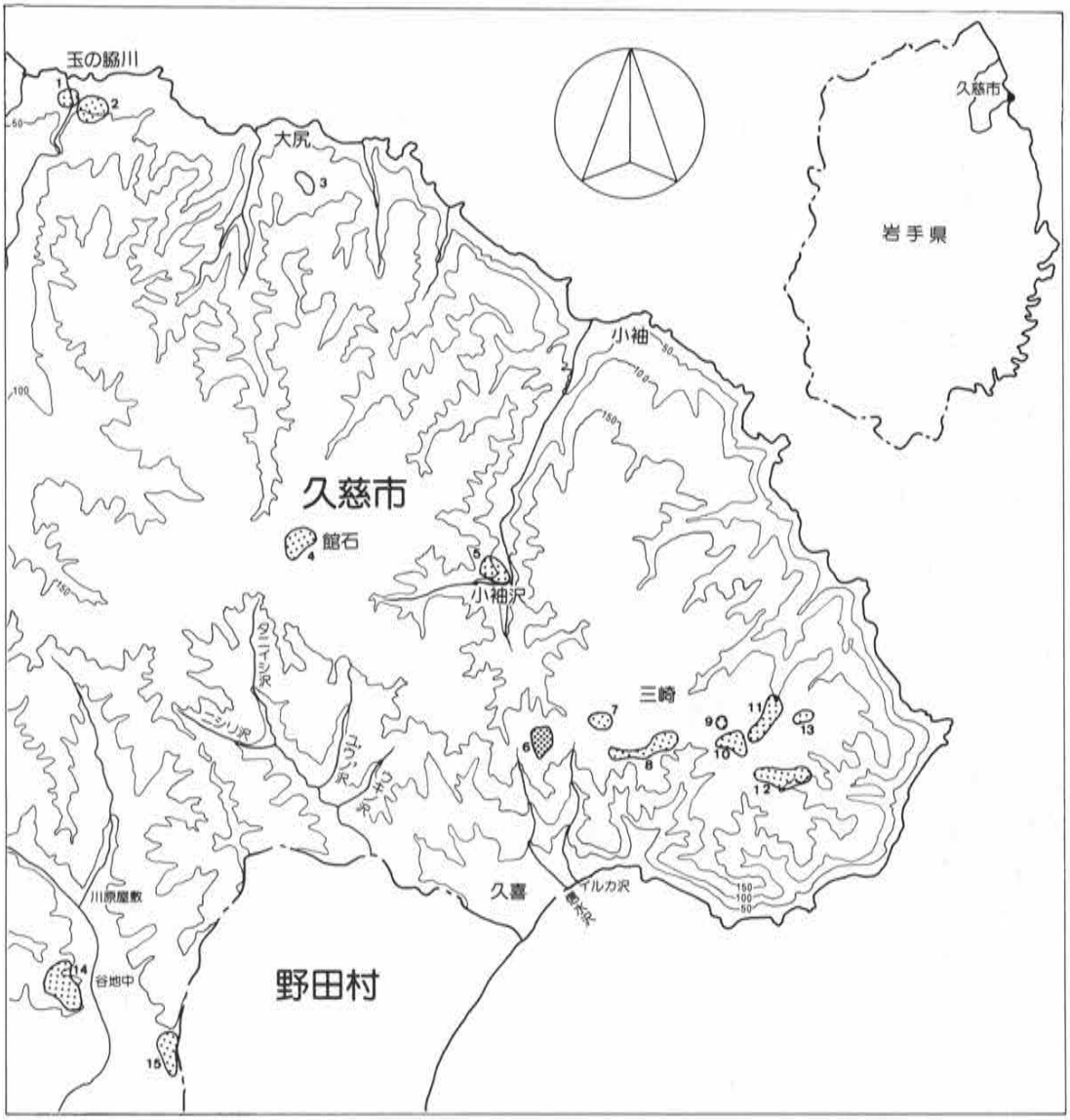
今回発掘することとなった台地は、分布調査で既に明確となっている遺跡に隣接し、耕作の度に土器片や石鏃が出土するため、遺跡が埋蔵されているであろうことは、予測されていた。

しかし、作目から見て耕作のため表土を深く掘り下げることもなく、現況保存は可能と推測していたのであるが、昭和51年８月久喜小学校改築に伴う地区座談会の席上、三崎地区は三崎海岸特有の急峻な丘陵地に生活基盤があり、生活空間は既に限界にある。学校用地を含め、今後の発展はこの台地以外に余地はない。速急に現状変更が可能ならしめるよう配慮して欲しい旨の強い住民要求が出された。これを受け、直ちに出県し、岩手県教育委員会文化課と協議したところ、国生尚技師の現地調査が行なわれ、三崎(Ⅲ)遺跡として緊急に発掘調査が必要な旨調査結果が報告された。

この丘陵地は、およそ16,000㎡であり、調査規模の大きさから、市単独事業としては不可能に近く、国県の援助を強く要望したところ県文化課の深いご理解をいただき、文化庁の補助対象事業として実施出来る見透しを得、総調査費700万円（国庫補助350万円、市350万円）を計上、発掘担当者として県文化課から、駒沢大学文学部出身千田和文氏のご推せんをいただき、国生技師の総括指導のもと、近い将来掘削されるであろう8,500㎡に限定、農耕地故、収穫後の時期をねらい調査計画を樹立した。

調査地は市道沿いではあるが、急峻な台地であり、器材運搬、調査員の移動等制約もあったがこれを克服し、昭和52年９月１日調査に着手、昭和52年11月10日発掘完了という70日間に及ぶ調査であった。

（社会教育課担当）



※6.三崎(III)遺跡

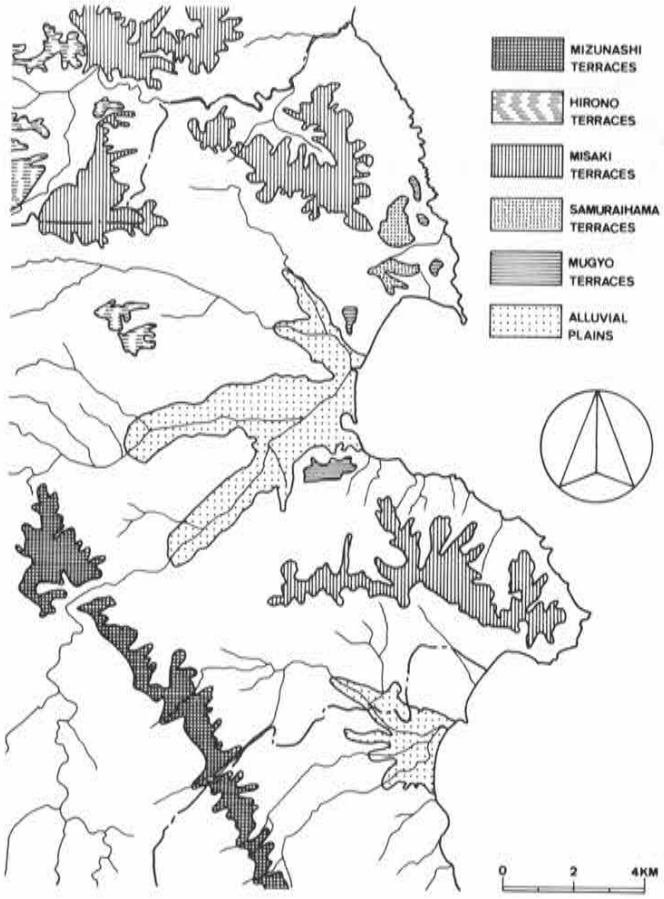
第1図三崎半島周辺の遺跡分布図

2. 遺跡周辺の自然環境

三崎Ⅲ遺跡は岩手県三陸海岸北部三崎半島の頸部、久慈市街より南東へ約8Km、北緯40°8′20″、東緯141°50′50″に位置している。太平洋岸より約0.8Km内陸部に入った標高180m前後の段丘上に立地し、付近の土地利用は農耕地であり、傾斜地においては林業的利用がなされている。調査区内は畑地、荒地であるが、戦前においてはアカマツなどの植生が見られた。本来の土壌は適潤性黒色〜黒褐色土で、その下層に浮石・火山砂が層状あるいは混入して存在するが、畑地利用後はこの地域特有の北西風による表面土壌の移動が著しく、地区によっては黄褐色土が露頭している。防風として畑地境界に柴木を植えたり、土手を作ったりしているが、遺跡の保存状態は甚だ不良である。久慈地方の気候は年平均気温10℃前後であり、年降水量は1100㎜前後で岩手県内で最も少ない地域となっている（岩手県林業水産部・1975）。

地形的概観は、三崎半島を含む宮古の北から八戸低地帯まで北部三陸海岸段丘が分布し、海抜100m以上の段丘が直接海に臨んでいる。海抜300m以下の地形が広く分布する種市から陸中野田までの地域は、海抜160m以上の残丘状地形が存在している。久慈地方の地形面は最上位段丘（水無面；270m余）、上位段丘群（広野面；220m、三崎面；200m、侍浜面；160m）、中位段丘（麦生面；110m）、下位段丘群（有家面；80m、種市面30m）、沖積面に区分される（米倉伸之1966）（第2図）。本遺跡をのせている段丘は、久慈地方における水無面の東側に分布する海抜220〜130mの三段の上位段丘群に属する三崎面であり、三崎半島を模式地として広野面の東側に分布し、海抜200〜160mの高度をもつ。広野面・三崎面の段丘堆積は一般に薄く、厚さ5m以下のところが多く、三崎面では基盤の上を直接火山灰が被っているところもある。

広野面・三崎面はともに基盤岩石をほぼ水平に切り薄い堆積物をのせている海蝕面が



第2図 海岸段丘分布図

が大部分であり、巾広い段丘面は海進時にその概形がつくられ、海退時に細部が仕上げられたと考えられている。

海水準変化をみると、新第三系堆積後の陸上削剝期に続く水無面形成期（Ⅰ期）の海進と地盤隆起運動に氷河性海面変化が複合した結果による水無面以後の3回の海進期（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期）を伴う総体的な海退が、久慈地方の地形発達の大枠を支配した運動であるとされている。

地質の上で、久慈地方には久慈層群（新白亜系の堆積岩）、野田層群（古第三系の堆積岩）が分布し、本遺跡周辺の基盤は野田層群久喜層を主体としている（小貫義男・1969）。野田層群は層厚350 mで、下から港層および久喜層に区分される。港層は野田湾宇部川口の港付近を模式地とし、層厚約180 mで下部層と上部層に細分される。層厚80 mの下部層は本層の基底礫岩に相当し、直径10 cm内外の石英斑岩、流紋岩、安山岩、花崗岩、チャート、粘板岩、砂岩および泥岩礫などで構成されている。層厚100 mの上部層は礫岩、砂岩を主とし、凝灰岩および石炭を夾在している。久喜層は層厚約170 mで、120 mの下部層と50 mの上部層に細分される。下部層は、久喜南部の海蝕岩を構成する一連の厚い礫岩で中～粗粒砂岩をレンズ状に挟んでいる。上部層は古第三系の最上部をなし、主として礫岩を挟む砂岩と2～4 mの厚さで部分的に植物化石の炭質物を挟む泥岩の互層からなっている。

参考文献

米倉伸之　1966 陸中北部沿岸地域の地形発達史・地理学評論　39

三浦　修　1968 海岸段丘からみた三陸リアス海岸の発達・地理学評論　41

小貫義男　1969 北上山地地質誌・東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告　69

岩手県林業水産部　1975 民有林適地適木調査（岩手北部区域）

※（　）内の値は模式地での段丘面上端高度である。

3. 周辺の遺跡

三崎Ⅲ遺跡の存在する海抜160～200 m程の台地上には、本遺跡の他に十数ケ所の遺跡が確認されている。今回、発掘調査期間中に東部の分布調査を行なった。時間的制約のため踏査範囲は限定され公平を欠き、また昭和47年の分布調査で確認された地点と重複するが、新たに確認した地点を含め、若干述べてみたい（第1図）。

玉の脇川下流、二子地区の海岸段丘上に二子貝塚と二子遺跡がある。前者からは円筒下層b式および大洞B・C式の土器片が出土している。後者からは円筒下層a・b式、大洞B・C式の土器片、ほぼ完形の中空土偶、またカキ、アサリなどの自然遺物が出土している。二子の東部に位置する大尻遺跡からは、円筒下層a・b・c・d式、円筒上層b式、大洞B・C_1・C_2式、石匙、剝片などが採集されている。さらに南部の内陸には館石(Ⅱ)遺跡・小袖沢遺跡が存在している。

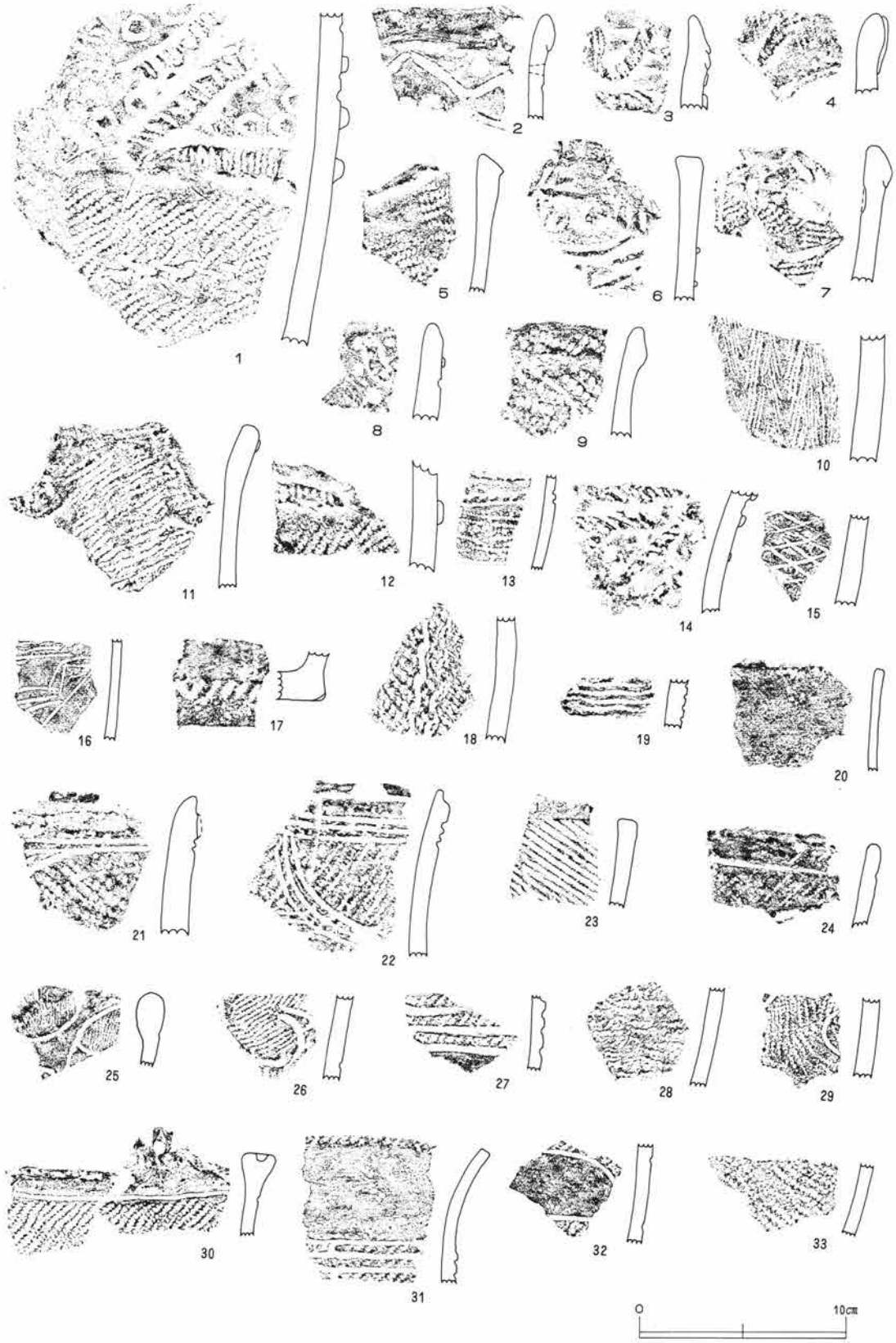
本遺跡以東の7遺跡はほぼ平坦な海岸段丘に位置しており、遺跡群の構成を考える上で重要な地点である。三崎地区の遺跡群からは中期の土器（第3図1・3・4・5・9・10・12・14・18・30、第4図41）、後期の土器（第3図15・16・27・29・31、第4図34・35）が採集されている。

第1図、南西の宇部川および支流によって形成された河岸段丘上には山屋敷遺跡（瀬川・佐々木 1976）・上新山遺跡があり、岩手県北沿岸地域における奈良～平安時代の集落跡が確認されている。

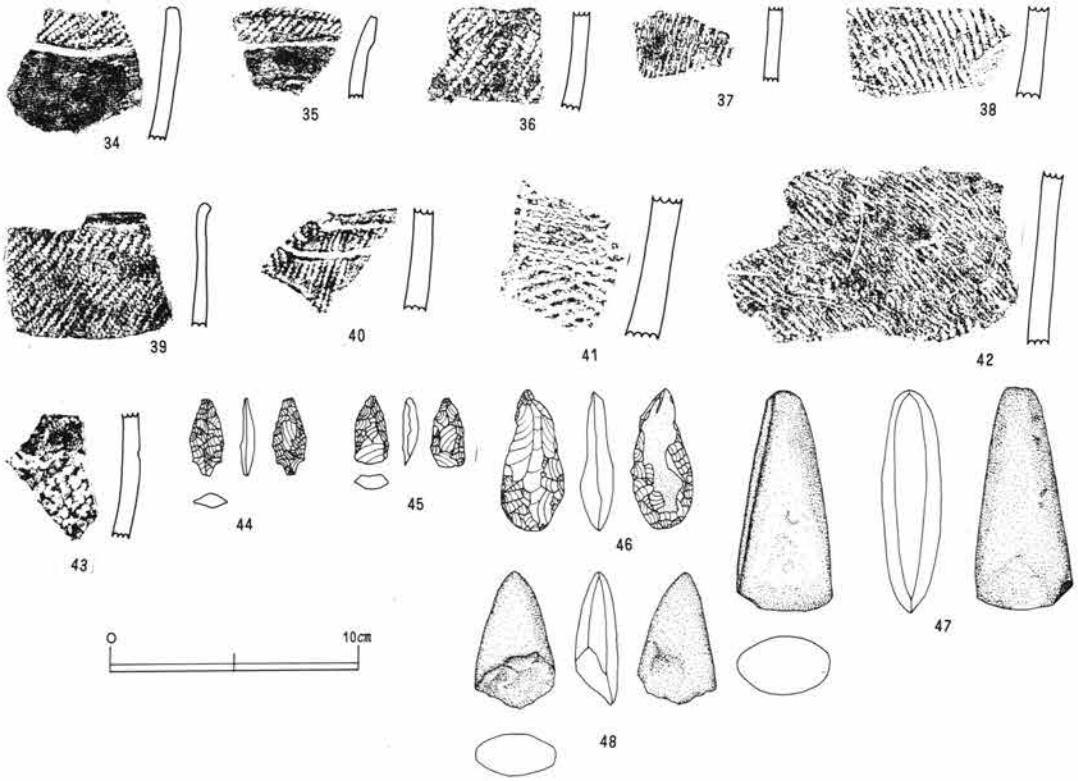
No.	遺跡名	所在地	地目	時期	種別	備考
1	二子貝塚	長内町二子	畑・宅地	縄文(前・晩)	貝塚	(046)円筒下層b・大洞B~C
2	二子	長内町二子	山林・畑	〃	貝塚・集落跡	(010)円筒下層a・b・大洞B~C
3	大尻	長内町大尻	畑・宅地	〃（前・後・晩）	集落跡	(007)円筒下層・上層・大洞
4	館石Ⅱ	宇部町館石	畑	〃	〃	(063)
5	小袖沢	宇部町小袖沢	畑	縄文(中)	散布地	(009)
6	三崎Ⅲ	宇部町第19地割	畑	〃 〃	〃	円筒上層・大木7a
7	三崎	宇部町三崎22－24	畑	〃 〃	〃	(008)大木7a
8	三崎Ⅰ	宇部町三崎	畑	〃（前・中）	集落跡	(064)円筒下層・石斧
9		宇部町	畑	〃		
10		宇部町	畑	〃（中・後）		石斧
11	三崎山	宇部町三崎山		〃 〃	集落跡	(066)石斧
12		宇部町	畑	〃（中）		
13	三崎Ⅱ	宇部町22－34－2		〃（前・中・晩）	集落跡	(065)大木9
14	山屋敷	宇部町山屋敷10	畑	縄文・弥生・土師	〃	(069)久慈市文化財報告書Ⅰ
15	上新山	宇部町	畑	土師	〃	(068)

※（ ）内数字は台帳No.

第1表　三崎周辺の遺跡一覧表

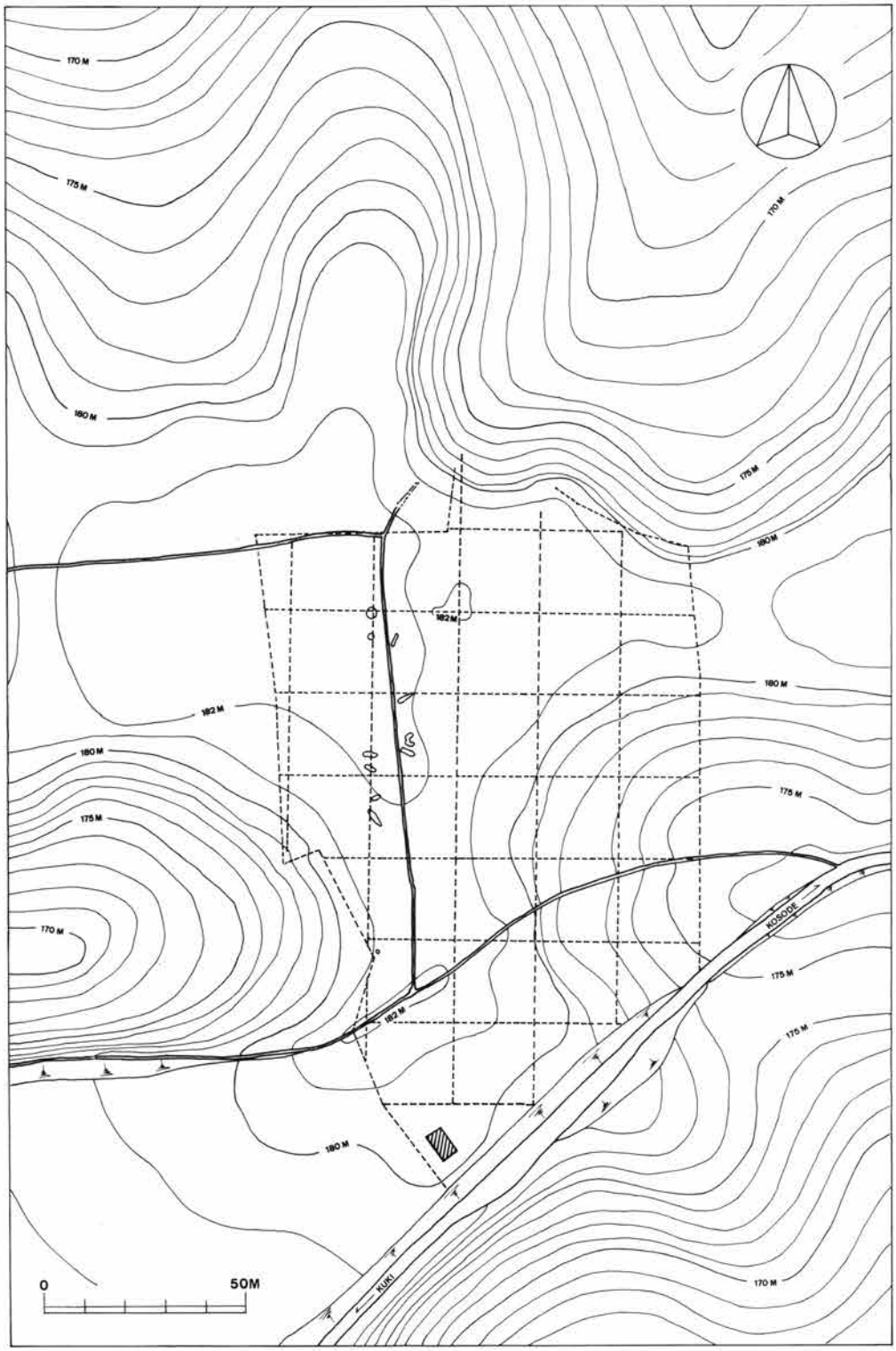


第３図 表採土器拓影図（１）



※〈採集地点〉　第１図 No.6（第３図 1～16）
No.7（第３図17～19）
No.8（第３図20～22,第４図45）
No.10（第３図23～33第４図47）
No.11（第４図34～38, 48）
No.12（第４図39～41）
No.13（第４図42～43, 46）

第４図 表採土器拓影図（２）表採石器実測図



第５図 遺跡地形図

4. 調査概要

調　査　要　項

1	遺　跡　名	三崎Ⅲ遺跡
2	所　在　地	岩手県久慈市宇部町第19地割 192 ～ 276 番地
3	調 査 期 間	昭和52年 9 月 1 日～11月10日
4	調 査 目 的	三崎台地への公共施設等の移転に先だち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行ない、記録保存をはかる。
5	調査対象面積	8,500 ㎡
6	調 査 主 体 者	久慈市教育委員会　　代表　教育長　横澤田喜代治
7	調 査 担 当 者	千田和文
8	調 査 補 助 員	村田良介（駒沢大学大学院）・石川誠・武田眞理子・金成純江・宮昌之・網谷映里・竹内明美・折原洋一・小長谷正治（以上駒沢大学学生）
9	事 務 担 当	久慈市教育委員会社会教育課長　水上貴一 久慈市教育委員会社会教育係長　遠山晴雄 久慈市教育委員会社会教育主事補　賀美吉之
10	調 査 協 力 者	地元婦人部　20名

調　査　方　法

発掘調査方法は地形の状況からグリッドとトレンチを併用し、調査区西側にグリッドを、南東斜面にトレンチを設定した。設定は久喜小学校建設予定地内において、南側道路境界標柱を原点として磁北を求め、センターラインを設定して20mの基本杭を打ち、さらに東西に派生して20mメッシュを大グリッドとした。グリッドは4m×4m、トレンチは4m×1.5mを基本とし、グリッドポイントは各々北東隅の杭とした。また土層観察用のセクションベルトのため、各グリッド南側および西側50cmを壁として残した。グリッド・トレンチの表示はセンターラインをAとし、東側をRから始め、西側がQで終わるようにした。南北の表示は北側より1・2・3……の算用数字を使用し、両者を組み合わせてA－1・A－2・A－3と呼ぶことにした。

出土遺物はグリッド・トレンチ単位でⅠ層が一括取り上げ、Ⅱ層以下が層位的に把握して遺物1点毎にナンバーを附し、実測図を記録した。同一個体は一括して出土状態の実測図を作成した。遺構に関しては、土層の堆積状態を観察し、写真および断面図を記録し、その後平面図を記録した。実測図スケールは1/10・1/20で行なった。

調　査　の　経　過

調査は9月1日より11月10日にわたって行なわれた。その結果、楕円形土壙3基、不整形土壙1基および台地の平坦部より並列状に長楕円形土壙7基が検出され、それとともに土器、石器の出土をみた。以下遺構検出の経過を主に略述してみたい。

9．1　発掘予定地の現地踏査、市教育委員会にて器材の点検および打ち合わせを行なう。

9．2　天候が不順で降雨、濃霧に悩まされ、測量作業に支障をきたす。

9．6　遺跡全景撮影後、発掘に着手。雨天のため粗掘り作業は本日が初日となり、北側D－11、F－12、H－13グリッドより開始。Ⅰ層出土遺物は縄文時代中期が主体である。

9．12　Ⅰ層除去作業は北東側に進む。W－5グリッドのⅠ層は20cm前後であり、Ⅱ層黒色土は存在せず、下部の黄褐色土層へ続く。

9．13　東側トレンチの調査に入る。V－24トレンチでは表土層より黄褐色土層まで120cm以上の堆積をみせ、表土層、黒色土層、暗褐色土層、黄褐色土を含む暗褐色土層、黒色土を含むブロック状の黄褐色土層に細分される。トレンチ内より遺物の検出はみられない。

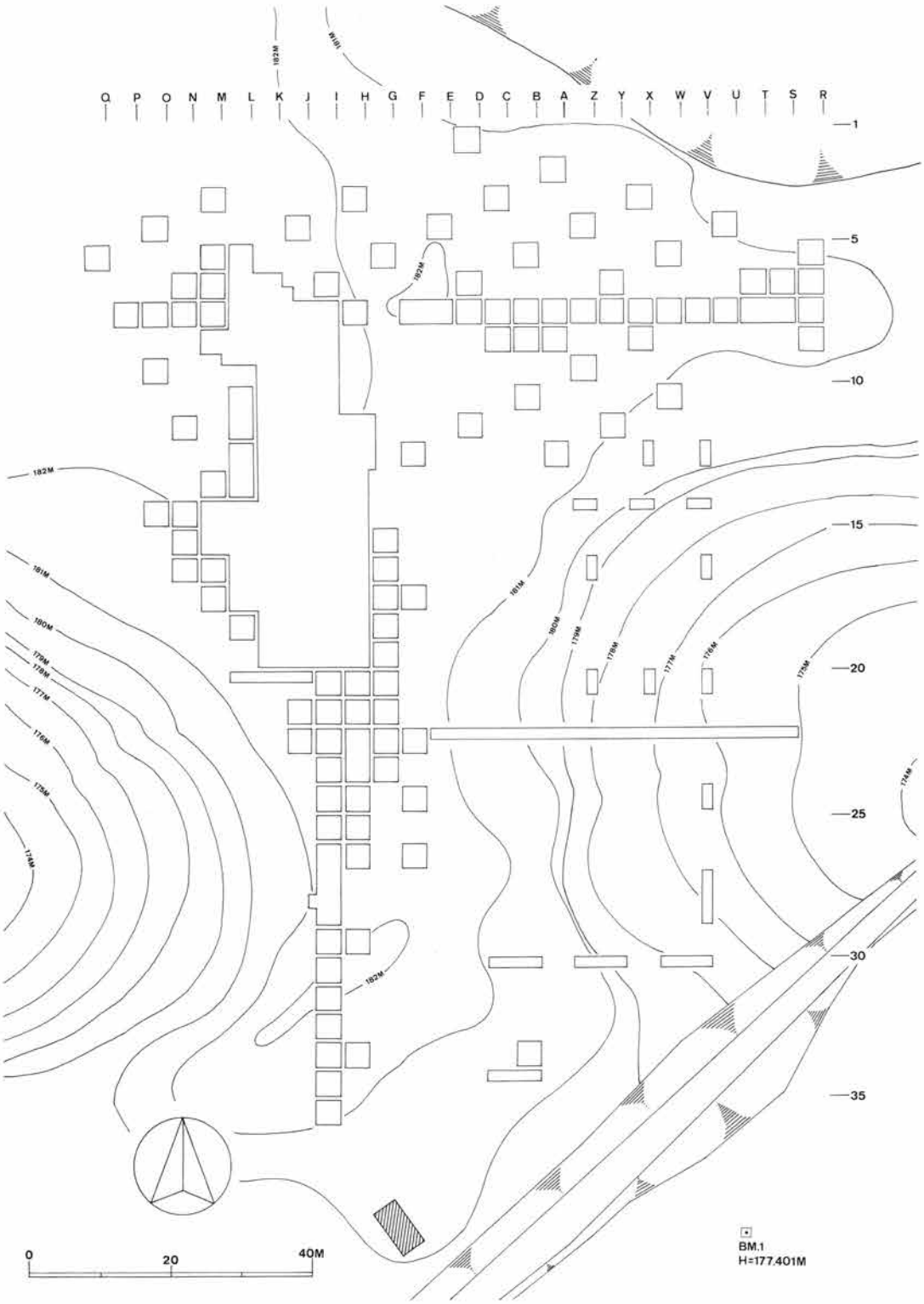
9．22　K－6、K－7グリッド、Ⅲ層上面にて楕円形を呈する落ち込み（第1号楕円形土壙）が確認される。

9．27　H－17、I－17、J－17グリッド付近、Ⅰ～Ⅲ層から縄文時代中期の土器片が出土している。

10．3　I－27、I－28グリッドにて縄文時代中期の土器1個体が落ち込み内より検出される（第2号楕円形土壙）。

10．6　K－8グリッドポイント西側より第3号楕円形土壙が検出される。

10．11　J－18、J－19グリッドより溝状の落ち込みプランが確認され、精査の結果、断面


Q P O N M L K J I H G F E D C B A Z Y X W V U T S R
1
5
10
15
20
25
30
35
182M
181M
180M
179M
178M
177M
176M
175M
174M
0
20
40M
BM.1
H=177.401M

第６図 発掘調査区全図

形が漏斗状を呈し、底面巾18cm前後の長楕円形土壙が検出された（第1号長楕円形土壙）。

10．14　第1号長楕円形土壙の北側J－16、K－16グリッドより第2号長楕円形土壙検出。覆土第4層より炭化材が多量に検出され、サンプリングを行なう。

10．16　J－15、K－15グリッドⅢ層内で第3号長楕円形土壙が検出される。

10．17　I－8グリッドⅢ層上面で第4号長楕円形土壙のプランが確認される。

10．22　H－15グリッド内で第5号長楕円形土壙が検出され、覆土上部より縄文時代中期のキャリパー形土器一個体が伴出した。

10．25　M・Nライン北側にグリッドを拡張。

10．27　7ラインを西側に拡張。S－7グリッド内で縄文時代中期土器 1/4 個体を検出。

10．30　J－17、J－18グリッド、第1号長楕円形土壙の北側に小規模な第6号長楕円形土壙を検出。

11．1　Iラインセクション用トレンチを掘り進め実測に取りかかる。終了毎にベルトの除去作業を行なった。第5号長楕円形土壙の北側、H－14、H－15グリッド内にて不整形を呈する落ち込みが検出。Ⅲ層下面で確認され、(A)(B)(C)の落ち込みに区分した。

11．2　Iライン、セクション用トレンチ、南側I－35グリッドまで延長、実測。

11．7　H－12グリッド付近にて第7号長楕円形土壙を検出。

11．9　全景撮影のため調査区全体の清掃。写真撮影。

11．10　現場器材、備品類の撤収、出土品を梱包し調査を終了する。発掘調査面積は2,800㎡である。

5．層　序（第7図・第8図）

土層観察用セクションは調査区内に東西、南北各ラインを定め実測を行なった。前述した如く本遺跡は土の移動が激しく、各個所に吹き溜りをつくり2次堆積の盛土がみられる。なお、遺物包含層の中で最も出土遺物が多いのはⅢ層であり、遺構の確認もⅢ層中である。

東西（22ライン）セクション（第7図）

第Ⅰ層；黒褐色土（表土）

第Ⅱ－b層；黒色土。橙色粒を多量に含有する。

第Ⅱ－c層；黒色土。土質は緻密で水分を多く含む（遺物包含層）。

第Ⅲ層；褐色土（遺物包含層）。

第Ⅳ層；黄褐色土。部分的に暗褐色土が混入する。

第Ⅴ層；橙褐色土（地山）。粘性、しまりがともに強い。

南北（Iライン）セクション（第8図）

第Ⅰ層；黒褐色土（表土）。

第Ⅱ－a層；黒色土。粘性をもたず、I－33グリッド付近より南側には存在しない。

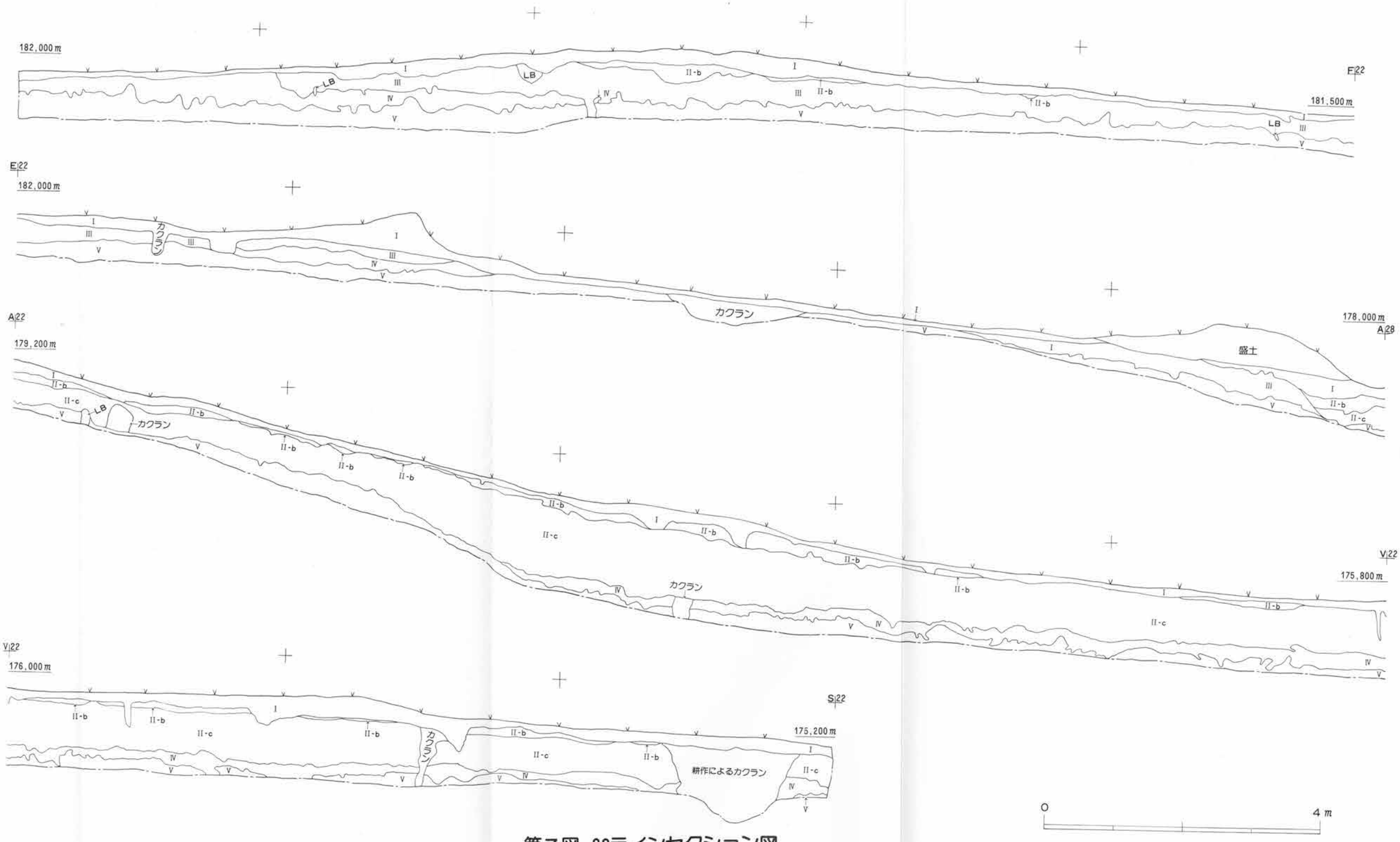
第Ⅱ－b層；黒色土。橙色粒を多量に含有する。

第Ⅲ層；褐色土。炭化物、黄褐色粒を含有する（遺物包含層）。

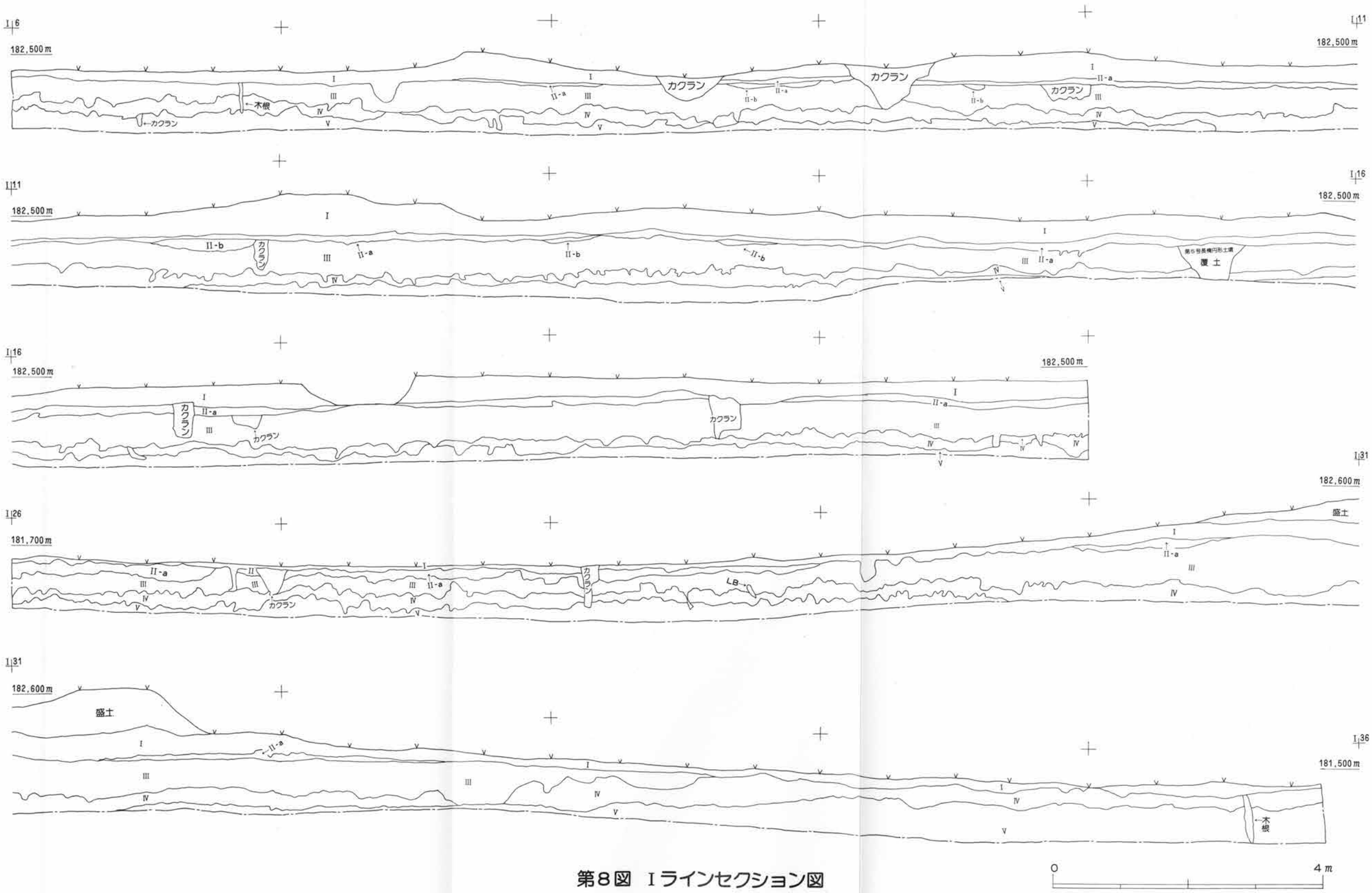
第Ⅳ層；黄褐色土。部分的に暗褐色土を混入し、粘性を有する。

第Ⅴ層；橙褐色土（地山）。粘性、しまりがともに強い。

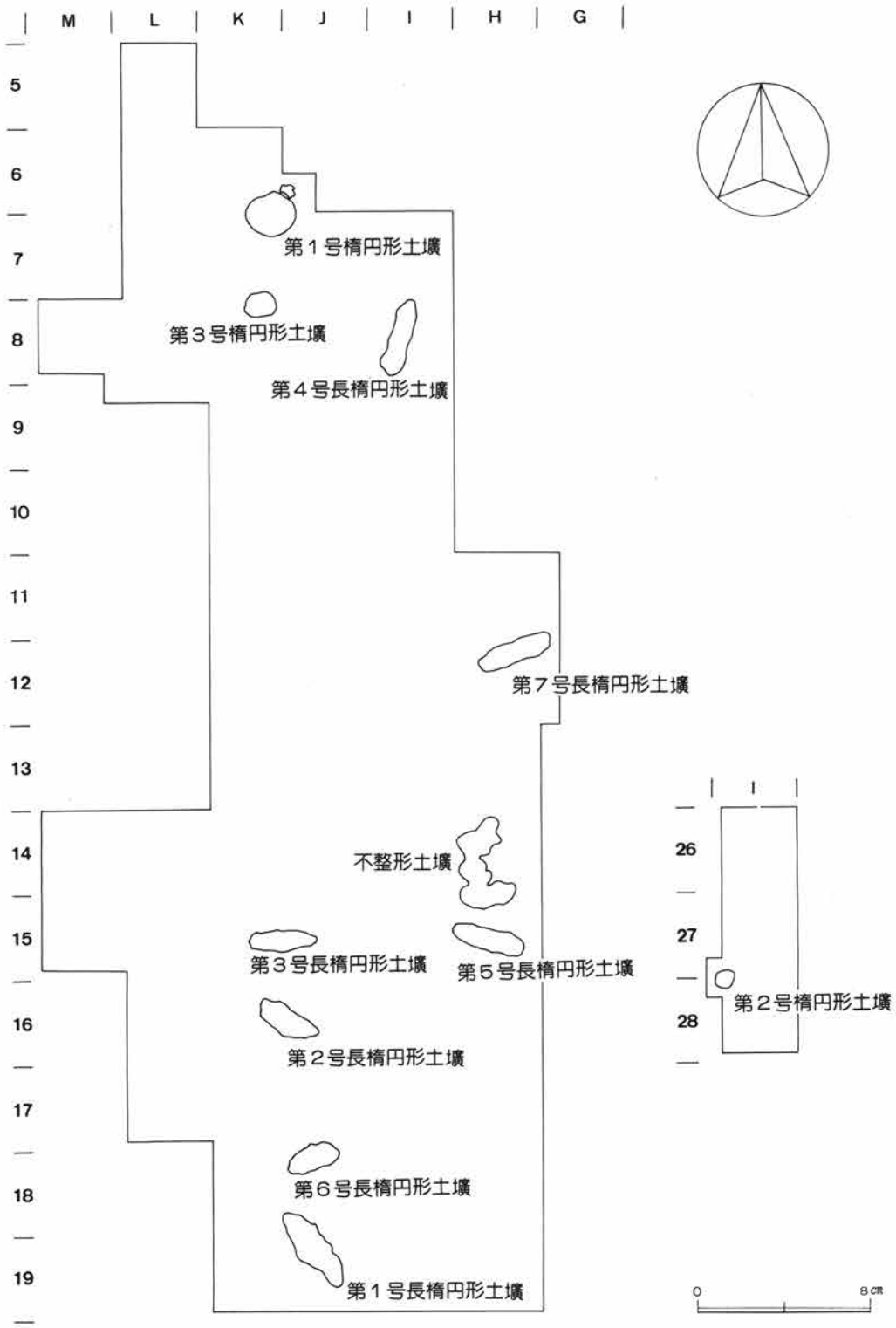
※盛土（2次堆積層）　LB（黄褐色土ブロック）



第7図 22ラインセクション図



第8図　Iラインセクション図


M
L
K
J
I
H
G
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
第１号楕円形土壙
第３号楕円形土壙
第４号長楕円形土壙
第７号長楕円形土壙
不整形土壙
第３号長楕円形土壙
第５号長楕円形土壙
第２号長楕円形土壙
第６号長楕円形土壙
第１号長楕円形土壙
I
26
27
28
第２号楕円形土壙
0
8cm

第９図 遺構検出位置図

6. 遺　　構

楕円形土壙

第1号楕円形土壙（第10図、図版8）

本土壙はK－7グリッドポイントのほぼ中央部に位置し、Ⅲ層上面精査中に検出された。平面形態は楕円形であり、開口部長軸228 *cm*、短軸198 *cm*、底面部長軸192 *cm*、短軸161 *cm*、長軸方向N－70°－Eを示す。Ⅲ層上面より掘り込まれており、壁の高さは南壁で40*cm*、北壁で55*cm*を計る。底面は凹凸であり、土壙外北東隅に灰黄褐色土の排土が確認されている。

覆土より縄文時代中期土器片が出土しているが、すべて同一個体であり、土壙外よりも検出されている。本土壙の性格は不明であるが、時期は覆土出土土器と同時期と考えてよいであろう。

層　序

第1層；黒色土、暗褐色土の混合層。ロームブロック、炭化物を含有する。

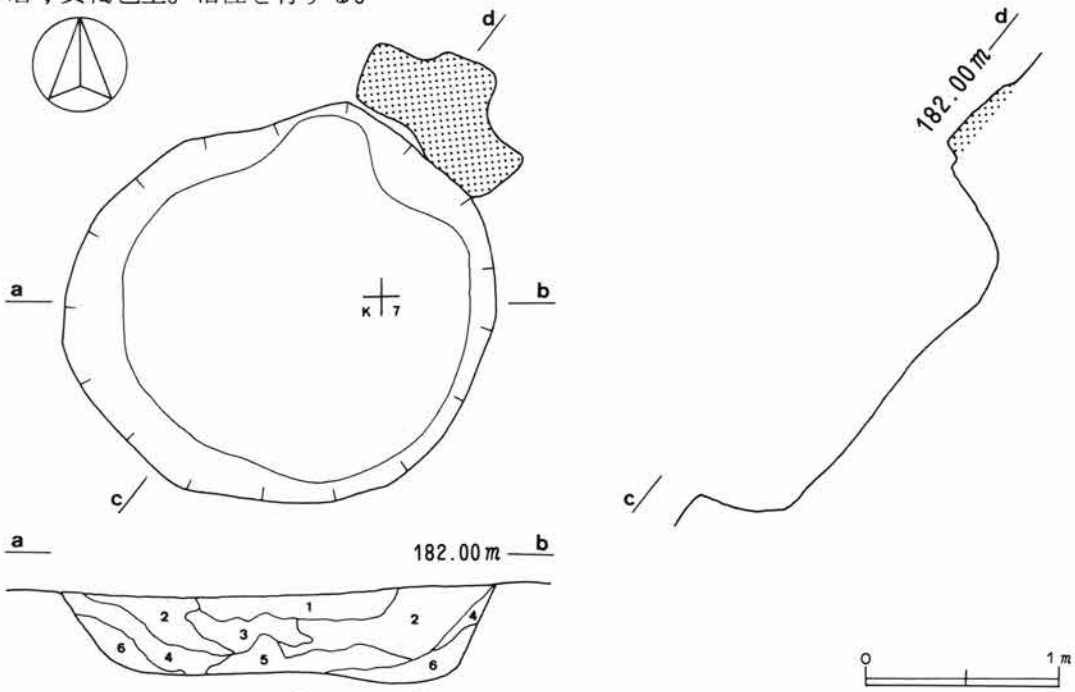
第2層；暗褐色土。ロームブロック、炭化物を含有する。

第3層；暗褐色土。少々粘性があり、ロームブロック、炭化物の含有量は第1層、第2層より少量である。

第4層；暗黄褐色土。

第5層；黄褐色土。シミ状に暗褐色土を含み粘性を有する。

第6層；黄褐色土。粘性を有する。



第10図　第1号楕円形土壙実測図

第２号楕円形土壙（第11図、図版８）

本土壙はＩ－27グリッド南西部、Ｉ－28グリッド北西部付近で検出された。平面形態は楕円形であり、開口部長軸118㎝、短軸90㎝、底面部長軸70㎝、短軸25㎝を計り、深さは中央部で確認面より32㎝である。長軸方向はＮ－70°－Ｅを示す。底面は凹凸になっており、立ち上がりは緩かに外傾している。

覆土は上部よりロームブロック、炭化物を含有する暗褐色土、その下部に暗褐色土と明褐色土の混合層で炭化物、ロームブロックを含有し、さらに粘性が強い褐色土層になる。

伴出遺物は上部の覆土より、円筒上層Ｃ式土器一個体である。

層　序

第１層；暗褐色土。10㎜未満のロームブロックおよび炭化物を含有し、粘性はない。

第２層；暗褐色土と明褐色土の混合層。炭化物、ロームブロックを含有し、粘性はない。

第３層；明褐色土。少々粘性があり含有物はない。

第４層；褐色土。炭化物を少量含有する。

第５層；黄褐色土。２㎜前後の黒色粒を含有し粘性が強い。

第３号楕円形土壙（第11図、図版９）

本土壙はＫ－８グリッドポイント西側でⅢ層上面精査中に検出された。平面形態は楕円形であり、開口部長軸159㎝、短軸114㎝、底面部長軸121㎝、短軸95㎝、深さは中央部で確認面より35㎝を計る。長軸方向はＮ－72°－Ｗを示す。土壙の壁は傾斜を有し、底面には南西部に２ケ所の浅い落ち込みがある。

上部の覆土は炭化物、褐色粒を多量に含有するしまりのない暗褐色土で、土壙南側より褐色土が混入している。

伴出遺物は覆土上部より土器小片２点が出土している。

層　序

第１層；暗褐色土。炭化物、褐色粒を多量に含有し、しまり、粘性ともにない。

第２層；暗褐色土。第１層より色調が明るく含有物が少ない。

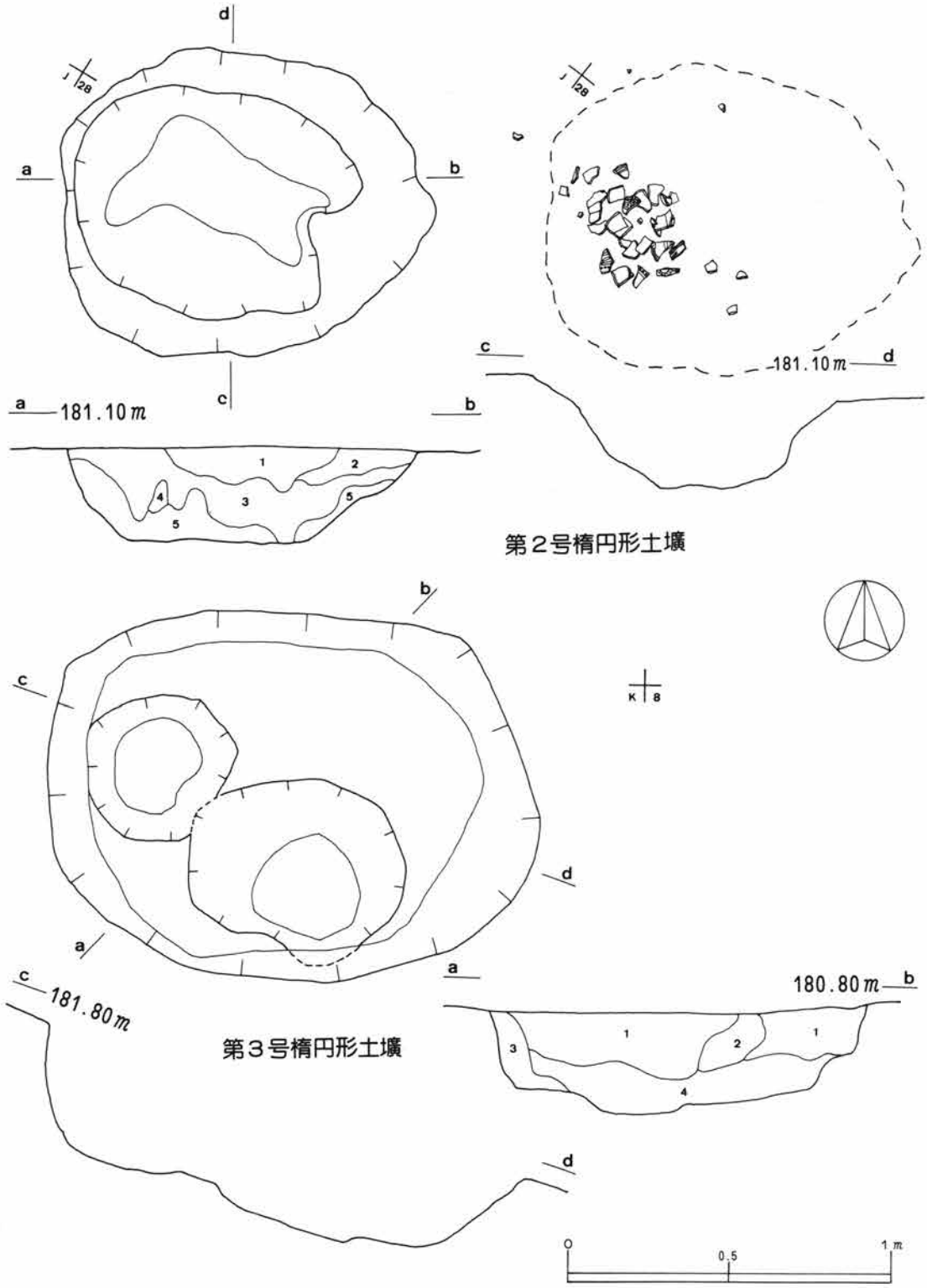
第３層；暗褐色土。４㎝未満の褐色土ブロック、５㎜未満の褐色粒を多量に含有する。

第４層；褐色土。褐色土をベースとし、少量の暗褐色土が混入している。

長楕円形土壙

第１号長楕円形土壙（第12図、図版９）

本土壙はＪ－18、Ｊ－19グリッド付近で検出された。本遺跡の長楕円形土壙７基の中で最も谷口部に位置し、規模も最大である。Ⅲ層精査中に確認され、平面形態は開口部長軸428㎝、短軸165㎝、底面部長軸403㎝、短軸18㎝の溝状を呈し、中央部の深さ160㎝を計る。長軸方向はＮ－37°－Ｗを示す。開口部はテラス状を呈し、覆土の状態から推察して剝落した



第11図 第２号・第３号楕円形土壙実測図

部分が大きく、確認面より35cm下がったところよりほぼ垂直な壁を呈す。両壁は堅緻であり底面はほぼ平坦で長軸両端は内湾気味に立ち上がる。

覆土は4層に分けられ、両壁側より黒色土を混入した黄褐色土が流れ込み、最下層に粘性のない褐色土層を有している。

伴出遺物は覆土上部より、時期不明の土器小片数点が出土している。

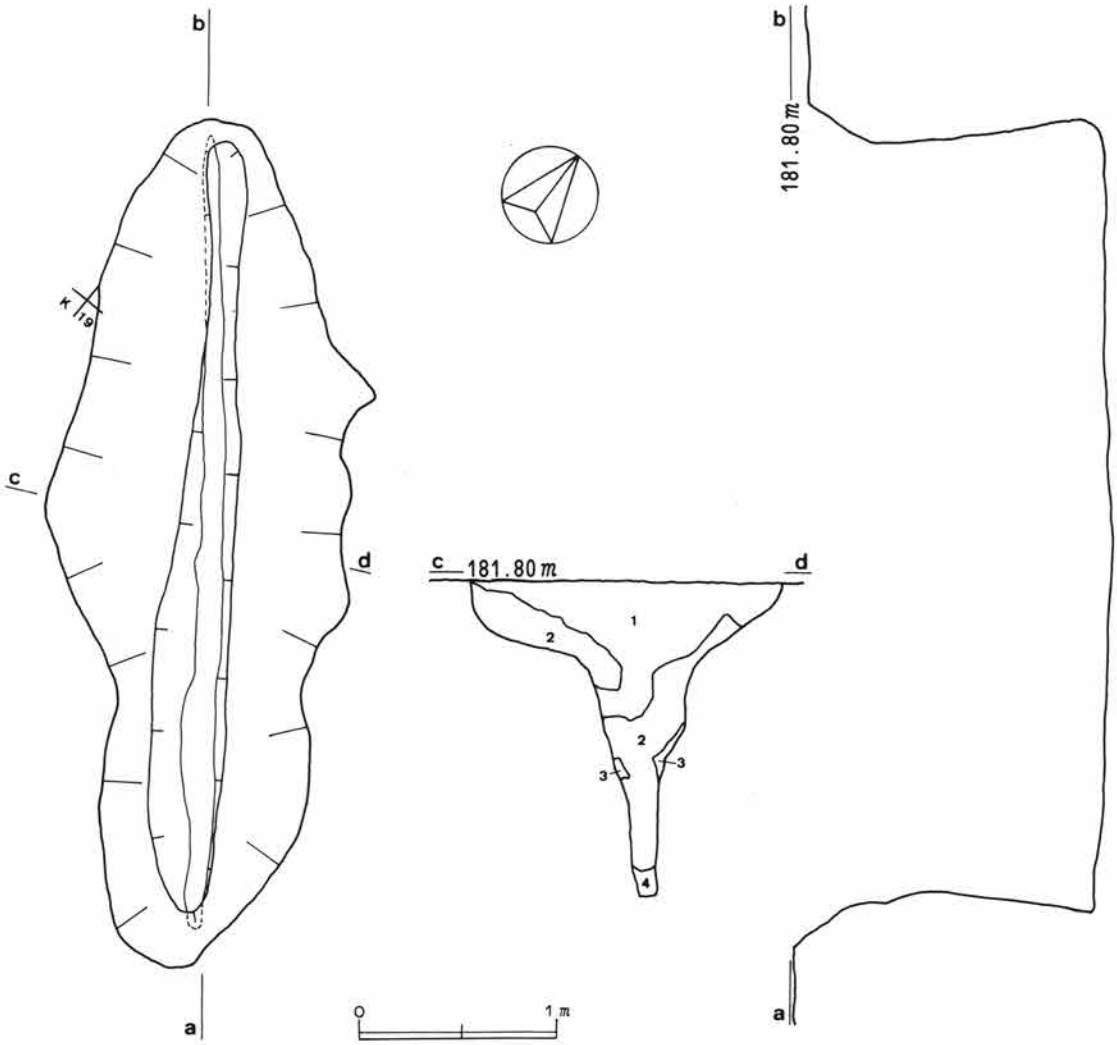
層　序

第1層；茶褐色土。黄褐色土を混入し、粘性はない。

第2層；黄褐色土。黒色土を少量混入し、第1層よりややしまりがある。

第3層；黄褐色土。第2層に近似するが黒色土の混入はない。

第4層；褐色土。黄褐色土を混入し、しまりがない。



第12図 第1号長楕円形土壙実測図

第２号長楕円形土壙（第13図、図版10）

本土壙はＪ－16、Ｋ－16グリッド内で検出された。地表面よりおよそ50㎝下がったⅢ層上面で確認され、黄褐色土と褐色土の混合したプランを呈している。開口部長軸326㎝、短軸140㎝、底面部長軸275㎝、短軸21㎝、中央部で深さ120㎝を計る。長軸方向はＮ－72°－Ｗを示す。短軸断面で北壁は中位部までおよそ45°の傾斜角、南壁は一段のテラスを有し、下半部は底面までほぼ垂直に落ちている。長軸断面は中位部が張り出しを有し、底面の立ち上がりは湾曲し底面はほぼ平坦であり、壁面および底面は堅くしまっており、覆土との識別は容易に確認できる。覆土は５層に区分され、１層より最下層まで炭化物を含有する。

伴出遺物は土器片３点、剝片２点であり、第４層より小枝と思われる炭化材（長さ22.5㎝、巾0.5～1.6㎝、径約1.6㎝）および直径４㎝程度の瘤状の炭化材が検出された。

層　序

第１層；褐色土。10㎜未満の黄褐色土ブロックと５㎜未満の炭化物を均一に含有し、粘性がない。

第２層；黄褐色土。黄褐色土をベースとして黒褐色土がシミ状に混入する。

第３層；褐色土。第１層より明るい色調で、第２層よりは暗く、５㎜未満の炭化物を均一に含有する。

第４層；褐色土。30㎜未満の黄褐色土ブロック少量含有し、粘性があり、10㎜未満の炭化物を多量に含有する。

第５層；黄褐色土。含有物はなく、非常にしまりが悪い。

第３号長楕円形土壙（第13図、図版11）

本土壙はＪ－15、Ｋ－15グリッド内Ⅲ層精査中に検出された。平面形態は開口部長軸320㎝、短軸104㎝、底面部長軸277㎝、短軸17㎝、中央部深さ108㎝を計る。長軸方向はＮ－86°－Ｗを示す。北壁は木の根の撹乱のためやや開きが大きく、テラス状を呈している。南側の垂直な壁は底面より75㎝を計る。長軸断面は西側で中位部が張り出ている。中位部より下半部の壁面および底面は非常に緻密である。本土壙より遺物の出土はない。

層　序

第１層；暗褐色土。若干の黄褐色粒を含有する。

第２層；暗褐色土。第１層よりやや明るい色調。

第３層；黄褐色土。

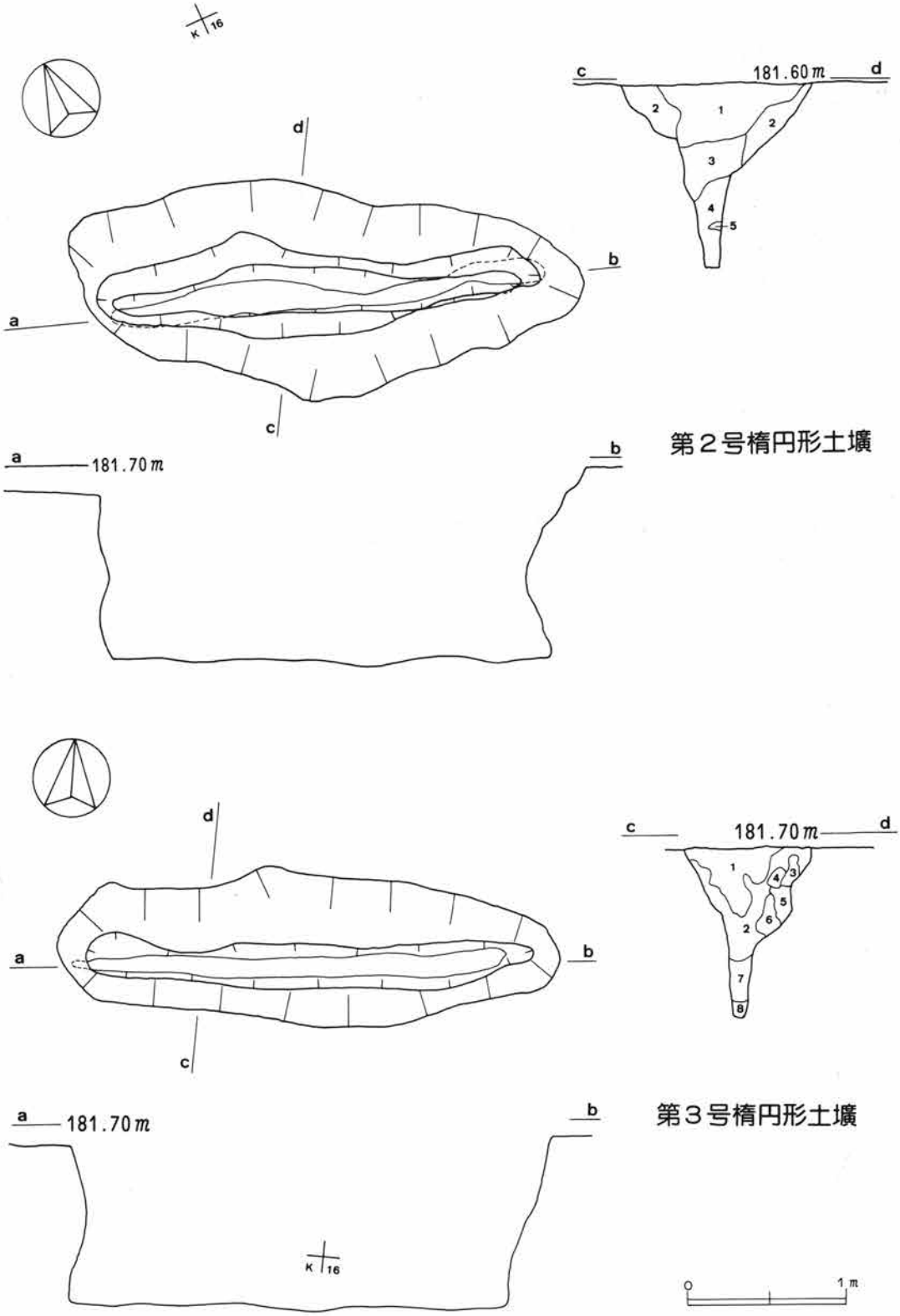
第４層；黒褐色土。有機物の分解による腐食土と思われる。

第５層；暗褐色土。第１層よりやや明るい色調を呈し、黄褐色粒を若干多く含有し、粘性はない。

第６層；黄褐色土。

第７層；褐色土。緻密で壁より固く、色調はやや赤味を帯びている。

第８層；暗褐色土。第２層に近い色調であり、ボソボソで軟らかい。



第13図 第２号･第３号長楕円形土壙実測図

第４号長楕円形土壙（第14図、図版11）

本土壙はＩ－８グリッド内に位置し、本遺跡でも最も北部に位置する長楕円形土壙である。Ⅲ層上面で確認され、開口部長軸 373 *cm*、短軸 124 *cm*、底面部長軸 321 *cm*、短軸14*cm*、中央部の深さ 124 *cm*を計る。長軸方向はＮ－13°－Ｅを示す。土壙の南西壁は木の根の撹乱のために開口角度が大きく、テラス状を呈しているが、セクション実測断面では漏斗状を呈し、垂直な壁は底面から65*cm*を計る。長軸断面では底面両端の湾曲はあまり発達せず、ほぼ垂直な立ち上がりをもつ。底面は中央部がややふくらみ、弓形を呈する。伴出遺物は検出できなかった。

層　序

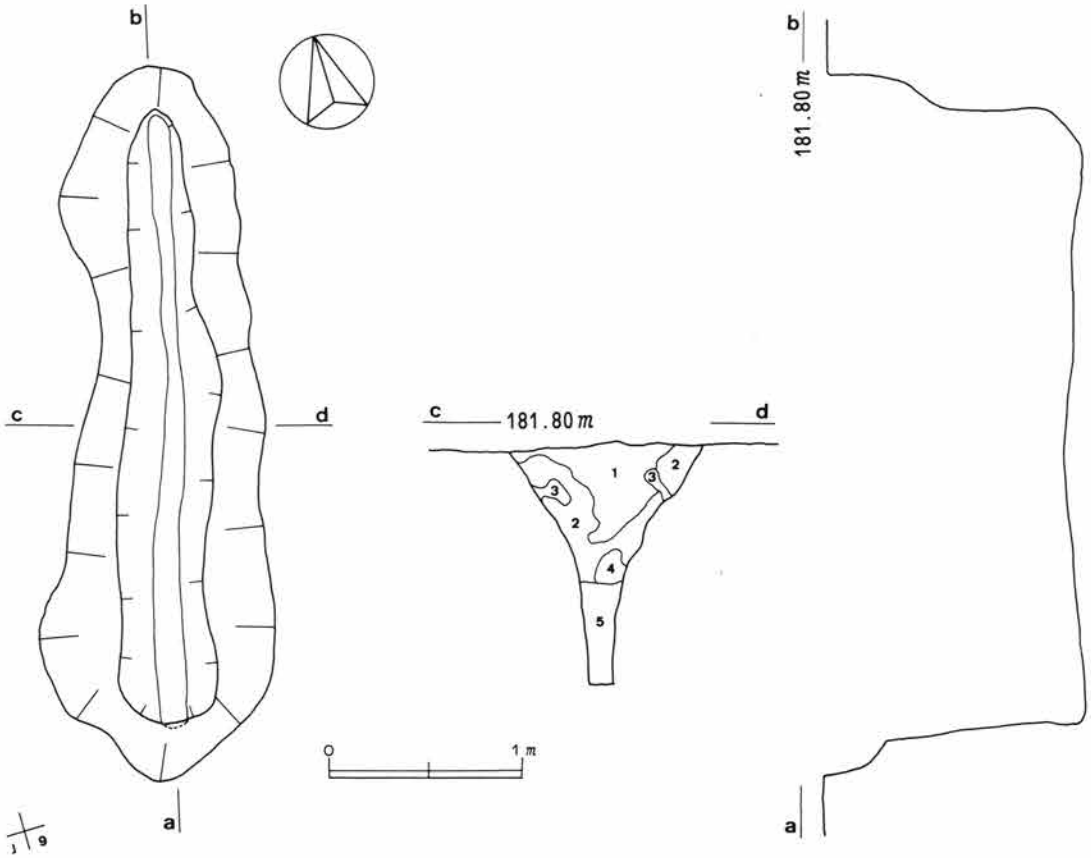
第１層；黒褐色土。５*mm*未満のローム粒を含有し、ボソボソである。

第２層；暗褐色土。５*mm*未満のローム粒を含有し、第１層よりややしまりがある。

第３層；暗褐色土。第２層に黄褐色土のブロックを含有する。

第４層；褐色土。緻密で固く、色調はやや赤味を帯びている。

第５層；暗黄褐色土。壁の黄褐色土より軟らかく、色調は暗い。壁との識別は容易である。



第14図 第４号長楕円形土壙実測図

第５号長楕円形土壙（第15図、図版12）

本土壙は台地平坦部のＨ－15グリッド内に位置する。確認面はⅢ層下面であり、平面形態は開口部長軸 335 *cm*、短軸 106 *cm*、底面部長軸 362 *cm*、短軸17*cm*、深さは中央部で 145 *cm*を計る。長軸方向はＮ－77°－Ｗを示す。壁の状態は良好であり、短軸断面はほぼ漏斗状を呈し垂直な壁の最大値は 123 *cm*を計る。長軸の計測値は開口部より底面部が長く、立ち上がりはオーバーハングする形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

伴出遺物は土壙群の中で最も多く、縄文時代中期大木8b式土器一個体分（第19図・図版16）72片、中期土器口縁破片２点、他土器小片５点、チャート質剥片３点の総数82点である。

層　序

第１層；褐色土。黒褐色土がシミ状に混入し、黄褐色土ブロックを少量含有する。

第２層；褐色土。黄褐色土が混入し、粘性、しまりがない。

第３層；褐色土。黄褐色土が混入し、色調は第２層より明るい。

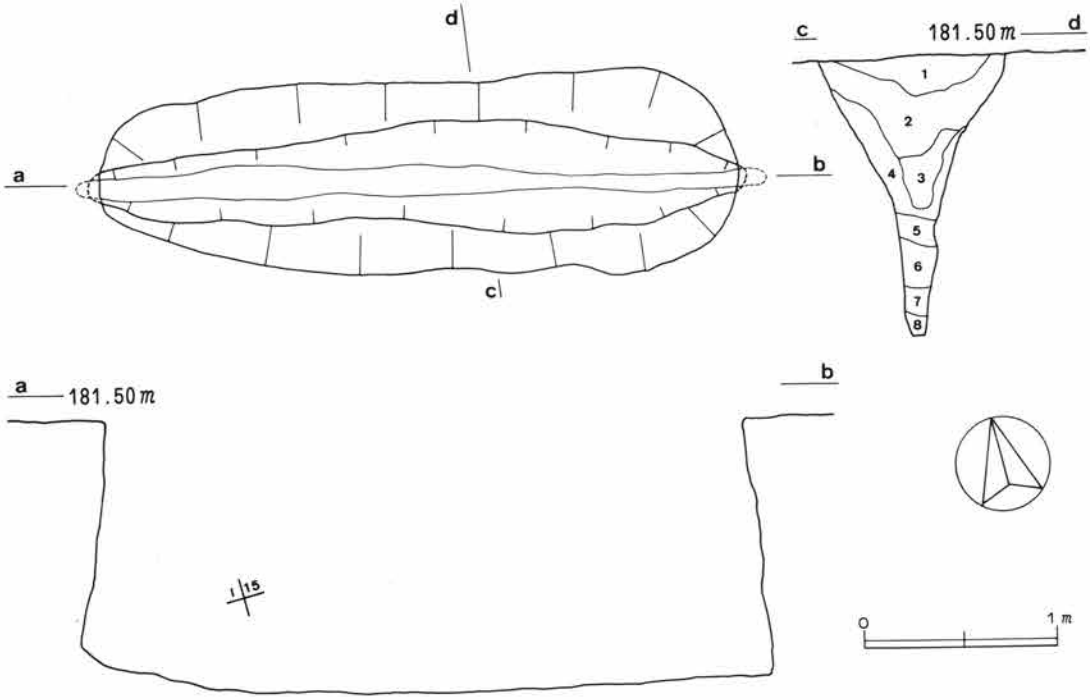
第４層；黄褐色土。黒色土粒を若干含有し、粘性がある。

第５層；黄褐色土。第４層と色調は近似するが粘性がない。

第６層；褐色土。第３層に近似し、粘性が若干ある。

第７層；暗褐色土。第６層よりも色調が暗い。

第８層；黒褐色土。粘性、しまりがない。



第15図　第５号長楕円形土壙実測図

第６号長楕円形土壙（第16図、図版13）

本土壙は第１号長楕円形土壙の北側に位置し、Ｊ－17、Ｊ－18グリッド内、Ⅲ層下面で検出された。開口部長軸 262 *cm*、短軸 120 *cm*、底面部長軸 222 *cm*、短軸20*cm*、深さは中央部で 114 *cm*を計り、最も規模が小さい長楕円形土壙である。長軸方向はＮ－69°－Ｅを示す。短軸断面形は南壁でテラスが発達し、下半部に張り出しが見られる。長軸断面形は中位部が張り出し、底面はほぼ平坦で両端部は若干湾曲を呈している。底面平面形は両端部が袋状を呈し、中央部短軸の最少値は８*cm*で狭まっている。伴出遺物は検出されていない。

層　序

第１層；黒褐色土。30*mm*未満の黄褐色土ブロックを含有し、粘性はない。

第２層；褐色土。20*mm*未満の黄褐色土ブロックを含有し、黒褐色土がシミ状に混入する。炭化物を微量含有する。

第３層；黄褐色土。しまり、粘性が若干ある。

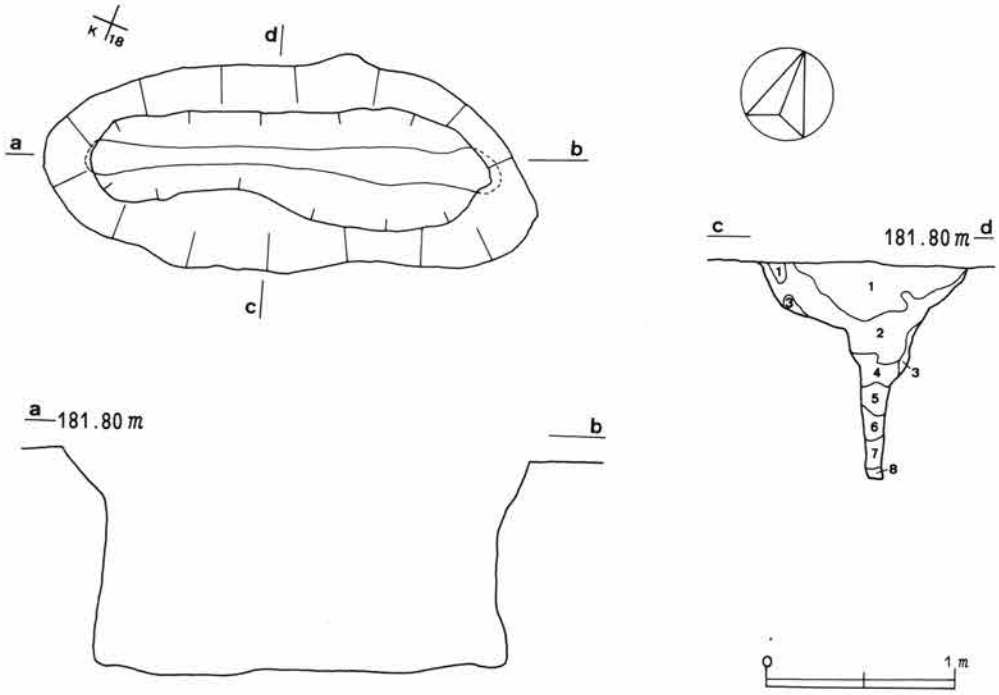
第４層；黄褐色土。第３層より色調が明るく、黒色土粒を微量含有し、粘性が若干ある。

第５層；黄褐色土。第４層に色調が近似するが、粘性がない。

第６層；黒褐色土。第１層より暗い黒褐色土である。黄褐色土粒を若干含有し、ボソボソである。

第７層；黒褐色土。色調は第６層よりやや明るく、第１層よりやや暗い。黄褐色粒を若干含有する。

第８層；褐色土。混入物はなく、しまり、粘性が全くなく軟らかい。



第16図 第６号長楕円形土壙実測図

第７号長楕円形土壙（第17図、図版14）

本土壙は台地中央部の平坦地、Ｈ－12グリッド付近に位置し、Ⅲ層下面精査中に検出された。平面形態は開口部長軸 350 *cm*、短軸 115 *cm*、底面部長軸 320 *cm*、短軸17*cm*、中央部深さ 128 *cm*を計る。長軸方向はＮ－71°－Ｗを示す。短軸断面形はほぼ漏斗状を呈し、垂直な壁の最大値は70*cm*を計る。長軸断面は上部で段をもち、中位部がやや張り出し、底面はやや東側に傾斜を見せ、両端部は外側に湾曲している。伴出遺物は検出されていない。

層　序

第１層；黒褐色土。粘性がなく、黄褐色土を混入し、炭化物、赤色粒を含有する。

第２層；暗褐色土。第１層より粘性があり、黄褐色土を混入する。

第３層；褐色土。部分的に10*mm*未満の黄褐色土ブロックを含有する。

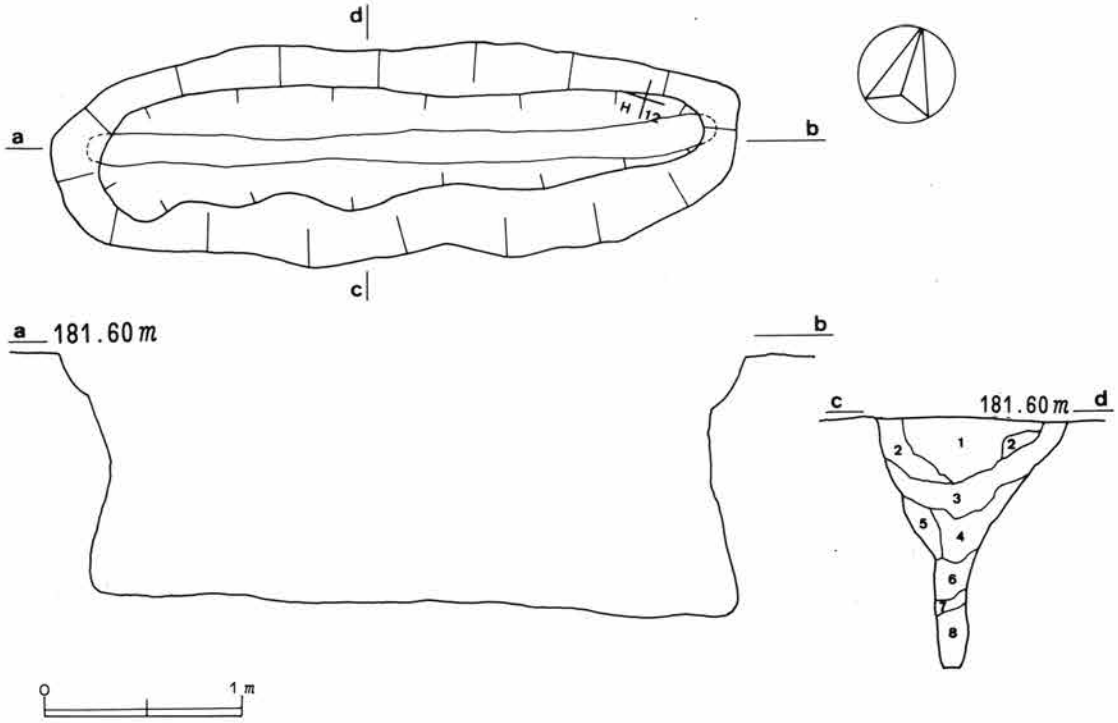
第４層；褐色土。第３層より色調が暗く、黄褐色土ブロックを含有し、ボロボロである。

第５層；黄褐色土。粘性があり、部分的に褐色土が混入する。

第６層；暗褐色土。色調は第２層より暗く、黄褐色土粒を含有し、しまりがない。

第７層；黄褐色土。ブロック状の堆積を見せ、粘性はない。

第８層；暗褐色土。色調は第６層より暗く、水気がなく、壁面、底面との識別は容易である。



第17図 第７号長楕円形土壙実測図

不整形土壙（第18図、図版14）

本土壙は台地平坦部のH－14、H－15グリッド内、第５号長楕円形土壙の北側に位置する。平面形態は、(A)北側より不整形の浅い落ち込み、(B)中央部の円形ピット、(C)西側の浅い楕円形の落ち込みからなっている。各々の規模は、(A)長軸 240 *cm*、短軸90*cm*、深さ18*cm*、(B)長軸 120 *cm*、短軸95*cm*、深さ40*cm*、(C)長軸 250 *cm*、短軸 102 *cm*、深さ24*cm*を計る。(A)(C)の壁高は低く、浅い皿状を呈し、底面の凹凸は甚だしい。覆土は暗褐色土および褐色土がシミ状、ブロック状に混入しており、いわゆる遺構（人工的所産）とは考えがたい。中央部(B)の円形ピットは壁面、底面ともにやや堅緻で黄褐色土を呈し、覆土上部より土器片１点を伴出している。(A)(B)(C)の新旧関係の判別は明らかにすることはできなかった。

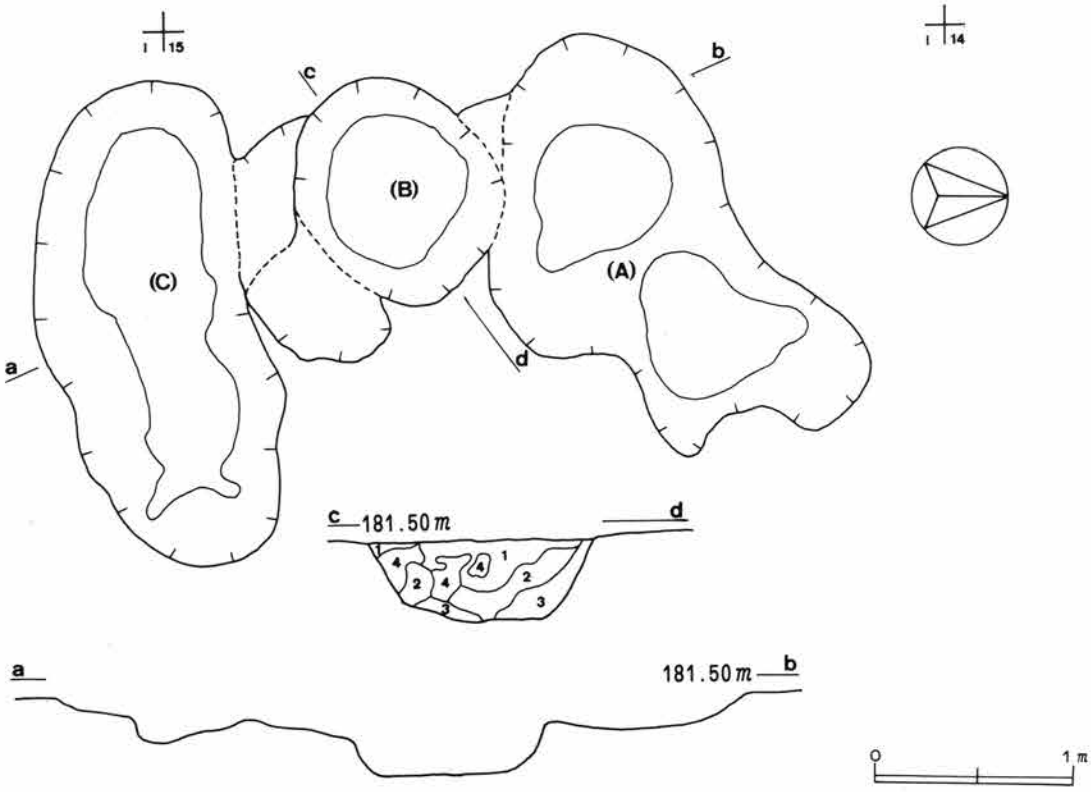
(B)円形ピット層序

第１層；暗褐色土。シミ状に黒褐色土を混入し、しまりはなく軟質である。

第２層；暗褐色土。第１層より色調は明るいが、土質は第１層とほぼ同じである。

第３層；褐色土。若干暗褐色土を混入し、土質は第１層、第２層より粘性が強い。

第４層；褐色土。第３層と色調は近似するが、しまりがなく、ブロック状を呈する。



第18図 不整形土壙

	番号	確認土層	開口部 長軸×短軸	底面部 長軸×短軸	確認面からの深さ	長軸方向	覆土分類	備考
楕円形土壙	1	Ⅲ層上面	228 × 198	192 × 161	52	N－70°－E	6 層	覆土内外より土器片同一個体出土
	2	Ⅲ層上面	118 × 90	70 × 25	32	N－70°－E	5 層	覆土内より土器一個体出土
	3	Ⅲ層上面	159 × 114	121 × 95	35	N－72°－W	4 層	覆土上部より土器片2点出土
長楕円形土壙	1	Ⅲ層	428 × 165	403 × 18	160	N－37°－W	4 層	覆土上部より土器片出土
	2	Ⅲ層上面	326 × 140	275 × 21	120	N－72°－W	5 層	第4層より炭化材、剝片出土
	3	Ⅲ層	320 × 104	277 × 17	108	N－86°－W	8 層	
	4	Ⅲ層上面	373 × 124	321 × 14	124	N－13°－E	5 層	
	5	Ⅲ層下面	335 × 106	362 × 17	145	N－77°－W	8 層	中期土器一個体、他剝片、土器片
	6	Ⅲ層下面	262 × 120	222 × 20	114	N－69°－E	8 層	
	7	Ⅲ層下面	350 × 115	320 × 17	128	N－71°－W	8 層	
不整形土壙	(A)	Ⅲ層下面	240 × 90		18	N－62°－E		
	(B)	Ⅲ層下面	120 × 95		40	N－59°－E	4 層	覆土上部より土器片1点出土
	(C)	Ⅲ層下面	250 × 102		24	N－78°－E		

第2表　遺構計測値表　（単位　*cm*）

7. 土　　器

本遺跡において、縄文時代中期、後期、および弥生時代の土器が出土した。ただし出土土器の絶対量が不足しているため、各々詳細な分類をするには不備な点が多いが、ここでは縄文時代中期の円筒上層式土器を第Ⅰ群、大木式土器を第Ⅱ群、後期の土器を第Ⅲ群、弥生式土器を第Ⅳ群として述べることにする。

第Ⅰ群土器（第19図1～3、第20図1～25、第21図1、図版16・17・18）

本群の土器は縄文時代中期前葉から中葉にかけての円筒上層b式よりe式までの土器を一括して分類した。

第1類土器（第19図1、第20図1～3、図版17）

第20図1は口縁部の小破片であり、平縁で外反し、器形は明らかでないが、推測すると円筒深鉢形を呈すると思われる。

第19図1の土器は口縁部文様帯が地文の縄文を磨り消した上に、貼付によるそれぞれ二条の波状隆線文と平行隆線文で区画されており、平行隆線文で区画された円部に円筒上層b式のメルクマールとなる爪形撚糸圧痕文が間隔を充填するように施文されている。撚糸の圧痕は隆線上や口縁部付近にも施文されている。胴部の地文は結束斜行縄文が横位方向に展開されているのが特徴である。焼成は非常に良く、内面調整が施されている。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒の含有が見られ、繊維は認められない。

第20図2・3は同一個体である。口縁部に斜位および平行の隆線文を有し、区画された内部には二条の撚糸圧痕文と爪形撚糸圧痕文が充填されている。撚糸圧痕文は、RL－LRの原体を交互に押圧するという特徴がある。焼成は良く、内面調整も丁寧である。

第2類土器（第19図2・3、第20図4、図版16・17）

本類には扇状突起を持つものと、平縁のものが見られる。

第20図4は扇状突起を持つもので、突起部分のみ出土したが、大形土器の破片と思われる。隆線を斜位、縦位にめぐらし、隆線文に沿って角ノミ状の工具で連続刺突文が施され、円筒上層c式の特徴を持っている。隆線文や口縁部の隆帯には細かい撚糸で刻み目状に圧痕が施されている。

第19図3は第2号長楕円形土壙の覆土内より出土し、ほぼ完形の土器である。口縁は平縁でやや外反する、寸の詰まった円筒深鉢形である。口縁部周辺に波状の隆線がめぐらされ、その下部に三条の平行隆線を貼り付けている。隆線文間はそれぞれ2列ずつ棒状工具によって斜方向より連続刺突文が充填されている。また上部の平行隆線文間には、ほぼ等間隔に6個のボタン状貼付が施されている。隆線上には撚糸圧痕が縦方向につけられているが、平行隆線文上には横方向の圧痕も見られ、撚糸自体も太いものが使用されている。胴部の地文は単節斜行縄文である。口縁部には補修孔が開けられている。焼成は非常に堅緻で、内面調整も丁寧である。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒が少ない。

第19図2はJ－17グリッドより出土した土器である。本類に含めることは若干疑問であるが、連続刺突文を有し、モチーフは次型式の円筒上層d式に近似するが、d式の隆線文による土器と差異が見られ、第2類の範疇に含めた。口縁は平縁で、ややキャリパー形に近く、

口頸部でやや外側にふくらみ、口縁で内反する。口縁部の一列の連続刺突文と懸垂された二列の連続刺突文を境として、両側横方向に間隔を持ち、平行三列の連続刺突文をめぐらしている。懸垂文は胴中央部付近まで見られ、刺突工具は半載竹管と思われる。器厚は口縁に近づくほど厚く、胴部はふくらみを持たず、円筒状になる。焼成は良く、胎土には砂粒が少ない。

第３類土器（第20図５～７、図版17）

破片だけである。

第20図５・６は同一個体であり、口縁は小波状を呈し、ゆるく外反するが、器形全体は不明である。口縁部周縁には隆起帯をめぐらし、細かい隆線による波状文を貼り付けている。小波状口縁の隆起帯直下からは地文の複節斜行縄文の上に一条の隆線懸垂文を垂下し、横方向に数条の孤状の隆線が伸びている。焼成は非常に堅緻で、内面調整も良い。胎土には砂粒が多く含まれている。円筒上層ｄ式に属するものであろう。

第４類土器（第20図８～21、図版17・18）

本類に属する土器は小破片が多く器形全体を推測できる資料はないが、円筒上層ｅ式に比定される土器を一括した。ボタン状突起を有する例、平縁で隆帯を持つ例、隆帯を貼り付けた例がある（第20図８～10）。

第20図11は波状隆線文の名残りとも思える鋸歯状沈線文が施されている。

第20図12～21の土器は小突起下より懸垂された文様に粘土紐を貼り付け、刺突文を施したものと、沈線で描かれたものがある。沈線で描かれたものには複数の沈線や、波状に垂下する例が多い。これらの懸垂文を中心として横方向に沈線による直線、孤線が展開する。焼成は一般に良く、内面も調整されている。胎土に砂粒は少ない。

第５類土器（第20図22～25、第21図２、図版18）

本類には円筒上層式土器に含まれる粗製土器を一括した。

第20図22～25は折り返し口縁で、山形の突起を有し、若干外反するものである。口縁部、胴部共に単節斜行縄文が施されている。焼成は良く、胎土に細かな砂粒を含んでいる。

第21図１は第１号楕円形土壙出土の土器である。口縁部は外反し、無文帯を有し、小突起が認められる。器形は円筒深鉢形を呈すると考えられ、頸部から胴部にかけて結束のある複節羽状縄文が施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は不良で、胴部には剝落した部分が多い。

第Ⅱ群土器（第19図４・５、第21図２～21、第22図１～９、図版19）

本群は大木７～８式土器に比定される土器を一括した。土器文様などに不明確な要素が見られるが、大木７式に相当する土器を第１類、大木８式に相当する土器を第２類に分類した。

第１類土器（第21図２～６、図版19）

本類の土器は詳細には大木7b式に含まれる。口縁部破片のみの出土であり、全体の器形は不明である。これらは口縁部の一部が把手状に張り出し、その上面に渦巻状の貼付を持ち、細い粘土紐によって区画された内側に撚糸圧痕文が施されている。張り出しの下面は無文、磨消しおよび波状に押圧した撚糸でＳ字状、渦巻状を呈している。この特徴は大木7b式の要素を多く含みながらも次形式の大木8a式に近くなっていることが認められる。焼成は非常に

堅緻で、色調は黒褐色、赤褐色、黄褐色とバラエティーに富み、円筒系土器と容易に区別ができる。

第２類土器（第19図４・５、第21図７～12、第22図１～９、図版19）

大木８式土器に比定される。

第19図５は完形であり、第５号長楕円形土壙より出土した。平縁でキャリパー形の深鉢である。胴部はややふくらみを有し、頸部でしまり、口縁部が外側に張り出しながら内反している。文様は口縁部上端に一条ないし二条の沈線と、頸部には一条ないし二条の沈線および一条の隆線を有している。沈線で区画された内部は一条ないし二条の沈線でゆるい波状の曲線文をつくり、波状の上部と下部に渦巻文を配している。胴部は単節斜行縄文であり、縦位に数条の磨消しが見られる。焼成はそれほど良くはない。色調は褐色を呈する。

第19図４の浅鉢形土器は口縁部付近に二条の沈線が施され、瘤状の突起を有している。突起には縄文が押圧されている。口唇部には刻み目を入れてあり、全体に単節斜行縄文が施文されている。底部にはやや外側に張り出し厚味がある。胎土には少量の小礫を含み、焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。

第21図12は口縁部が欠損しているため不明であるが、胴部は円筒形を呈する。胴部に粘土紐を鉢巻状に貼り付けている。地文は複節斜行縄文である。焼成は良く、胎土に砂粒を含んでいる。

第21図８・９は口縁部がやや外反する平縁の土器であり、口縁部に粘土紐を貼り付け、指圧している。Ｃ字状、Ｓ字状の祖形となるものであろう。焼成は良く、胎土に砂粒を含み、内面の調整も良い。

第21図10・11は、平縁でキャリパー形の土器であり、頸部に隆線の貼り付けが見られる。地文は単節斜行縄文である。焼成はあまり良くない。

第22図１～６は頸部に二条の平行沈線または一条ないし二条の隆線を有する土器である。胴部に沈線また隆線で渦巻文を描く例もある。器形は、頸部でしまり、口縁部がゆるく外側に張り出しながら外反するものである。地文は単節斜行縄文のものと複節斜行縄文のものとがある。一般に焼成は良く、胎土に砂粒を含んでいる。

第22図７・８は大木式土器の粗製土器である。円形突起を有し、内部に瘤状貼付を有するものもあり、円筒式土器の影響をうけていると推測される。地文は単節斜行縄文である。焼成は比較的良く、胎土に砂粒を含んでいる。

第22図９も粗製土器であり、折り返し口縁で小突起を有する。口縁部から胴部にかけて、単節斜行縄文が施されている。口縁付近に補修孔が開けられている。

第21図７は口縁部破片である。口唇部より続く隆線が突起下で渦巻をつくり、そこから沈線が懸垂されている。この土器にみられる突起は大木式のものではなく、岩手北半などの円筒系土器の影響をうけたものであろう。

第Ⅲ群土器（第22図10～12、図版20）

後期の土器は破片のみの出土であり、器形は不明であるが、文様要素より２種が確認されている。

第22図11・12は同一個体である。沈線による平行線文、曲線文で表わされており、二条ないし三条の沈線で囲まれた内部を指で磨り消している。２片とも胴部破片であり、若干ふく

らみを持つ器形であることが認められる。焼成は非常に堅緻で、内面は指ナデ横方向による最終調整をしている。地文は無節の斜行縄文である。後期初頭に位置する土器であろう。

第22図10は曲線的な磨消縄文を構成する沈線に沿って、連続刺突文を連ねた土器である。口縁部は欠損しており不明であるが、胴部はあまりふくらみを持たず、底部付近でややしまる器形である。文様構成としては、曲線的な磨消縄文を表わし、沈線に沿って竹管あるいは棒状工具によって連続した刺突文を有し、底部付近まで施されているのが特徴である。器面の調整は他の土器と比較して特に入念に施されており、胎土に雲母片、砂粒を若干含んでいる。焼成も良く、色調は褐色を呈し、部分的に黒褐色を呈するところもある。縄文は単節LRで横方向が多く、部分により縦方向にも施文されている。出土状況は単独で、他に類似した土器は確認できなかった。

第Ⅳ群土器（第22図13～26、第22図1～15、図版20）

本群の土器は弥生式土器を一括したが、小破片で器形を推測できるものが少ないため、文様要素から4類に分類した。

第1類土器（第22図13～18、図版20）

口縁部付近に二列一組の平行沈線数条で文様が構成されている土器である。地文は斜行縄文であり、地文を磨り消した後に平行な二条の沈線をひき、その後に棒状工具で連続的に刺突文が施されている。また、連続刺突文で区画された内部に沈線で鋸歯状文が施されているものがある。器厚は薄く、内外面とも良く調整されている。胎土は極めて細かく、色調は灰褐色、黄褐色を呈す。焼成のあまり良くない土器もある。

第2類土器（第22図19・22～25、図版20）

第22図25は口縁部と思われる無文帯に浮線波状文が施されている。浮線波状文は二条の平行沈線の間の帯状部分の上下を細い棒状工具の尖端で交互に刺突したものであるが、破片のため一条のみであるのか、数条であるのかは不明である。破片から推測して口縁部は、ある程度の角度を持って外反していると考えられる。内外面とも調整が施されており、焼成は良く赤褐色を呈している。

第22図26は口唇部に細かな縄文が施されている。

口縁部が無文のものと縄文が施されているものとがあるが、磨消手法は見られない。

第3類土器（第22図20、第23図1～6、図版20）

細い沈線による変形工字状文を描き、沈線に平行して撚糸圧痕文が施されているもの、縄文の上に工字状文が施されているもの、沈線によってV字状文または曲線文が施されたものなどがある。土器は薄手で焼成も良く、器面も良く調整されている。胎土には細かな砂粒を含んでいる。色調は灰褐色、灰白色を呈している。

第4類土器（第23図7～15、図版20）

縦位に細かい単節縄文が施されている土器である。胴部がふくらみを持つ器形と推測される。焼成は良く、胎土には砂粒を含み、器面が調整されている土器もある。

底部（第23図16～19、図版20）

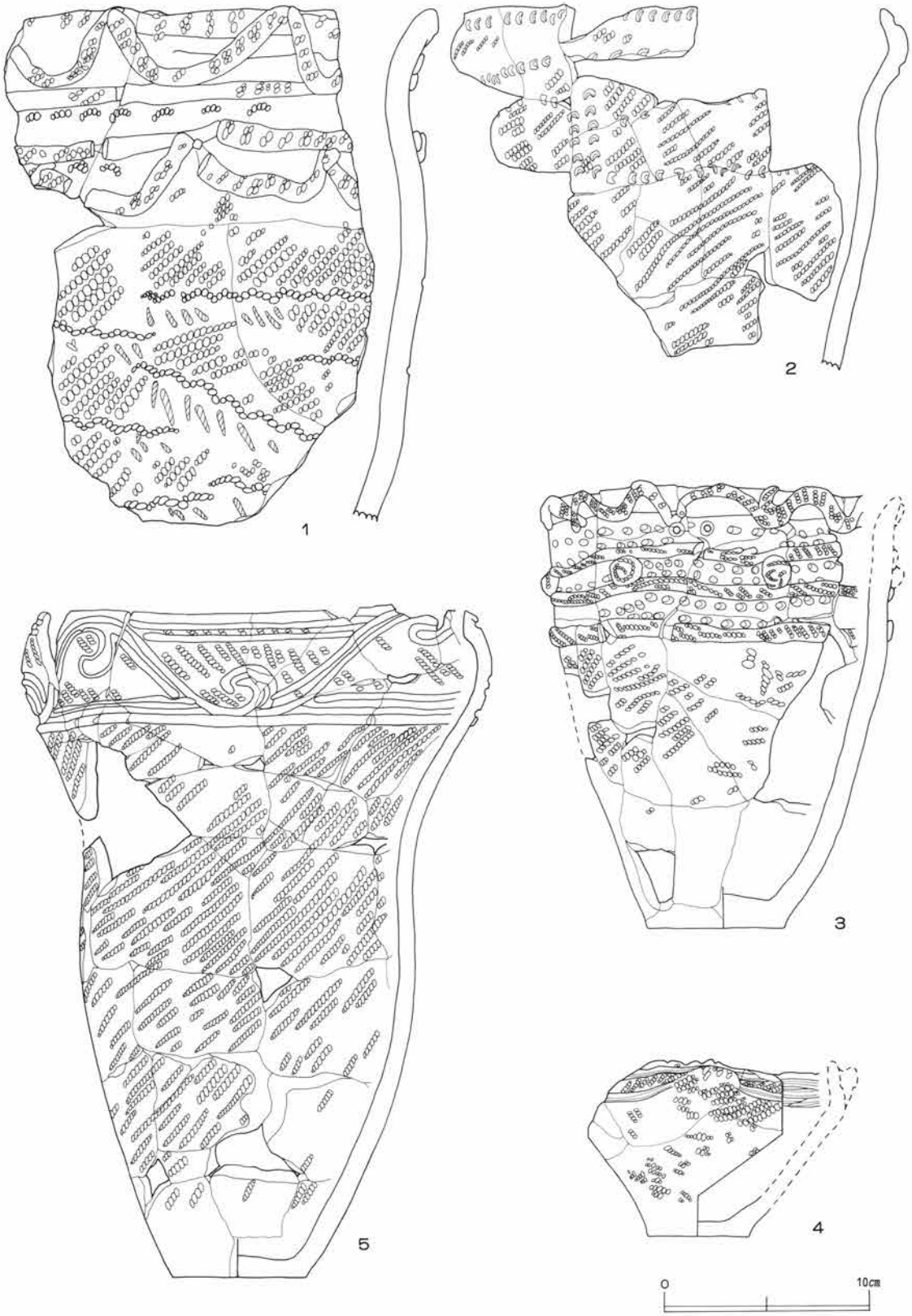
土器の底部は小破片を含め、35片出土している。底面の形状はほとんど平底を呈し無文であるが、若干上げ気味の底部も見られる。

第23図16は底径11.3 *cm*、底厚0.7 *cm*で砂粒を含み、色調は褐色を呈す。無文、平底であり成形は底部と体部を接合し、体部の下端を引き伸し底部へ折り曲げて密着させている。

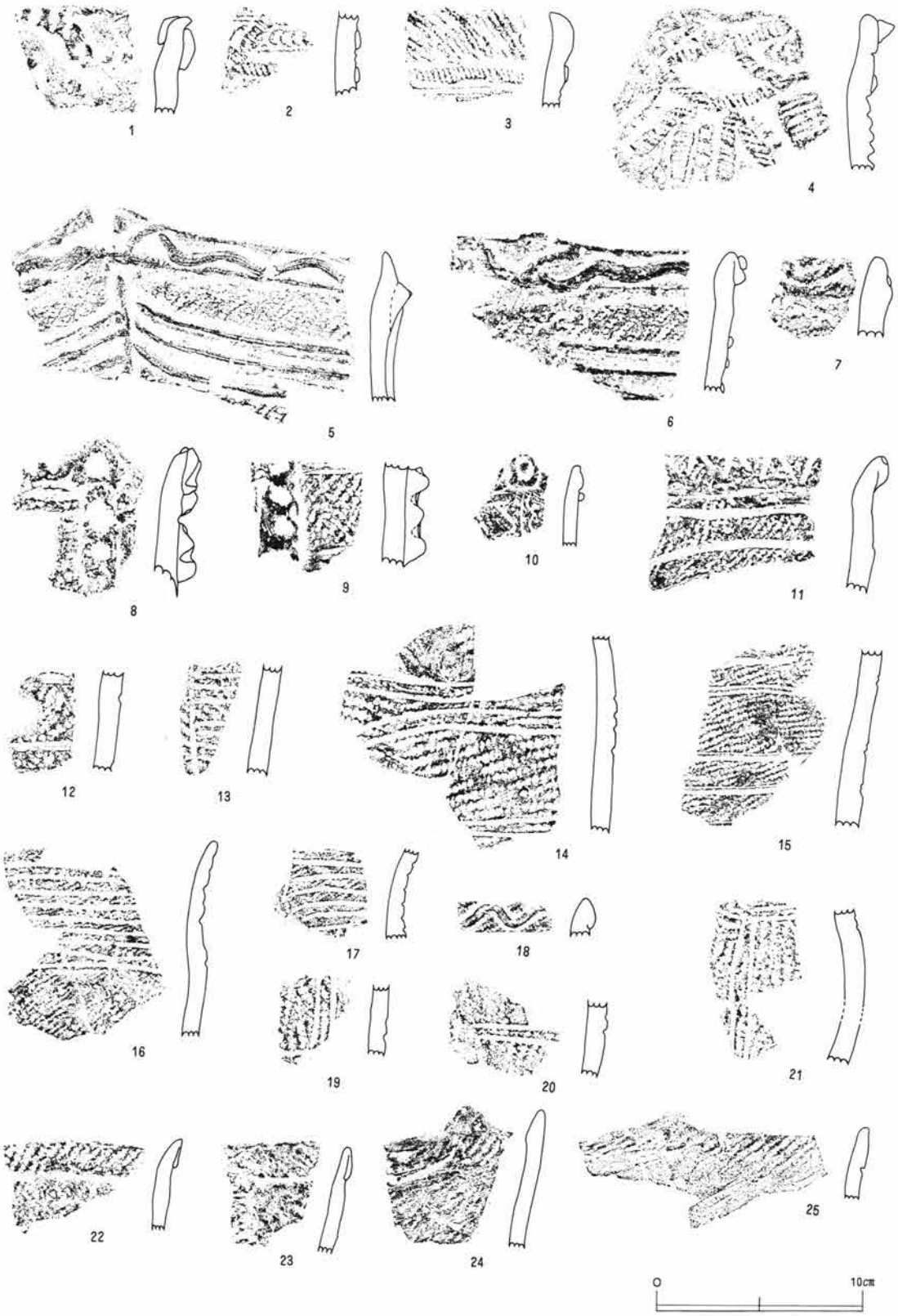
第23図17は底径 9.5 *cm*、底厚 1.1 *cm*を計る。胎土は砂粒を含み、暗褐色を呈し、無文、平底である。成形は円板状の底部と体部との接合であり、17と同じ技法と思われる。

第23図18は底径 9.5 *cm*、底厚 0.7 *cm*を計る。砂粒を含み、色調は赤褐色を呈し、無文、平底である。成形は円板状の底部と体部を接合した後に、底辺部に補強の粘土紐を貼り付け、底部、体部へそれぞれ伸し密着させており、張り出す形状を呈している。

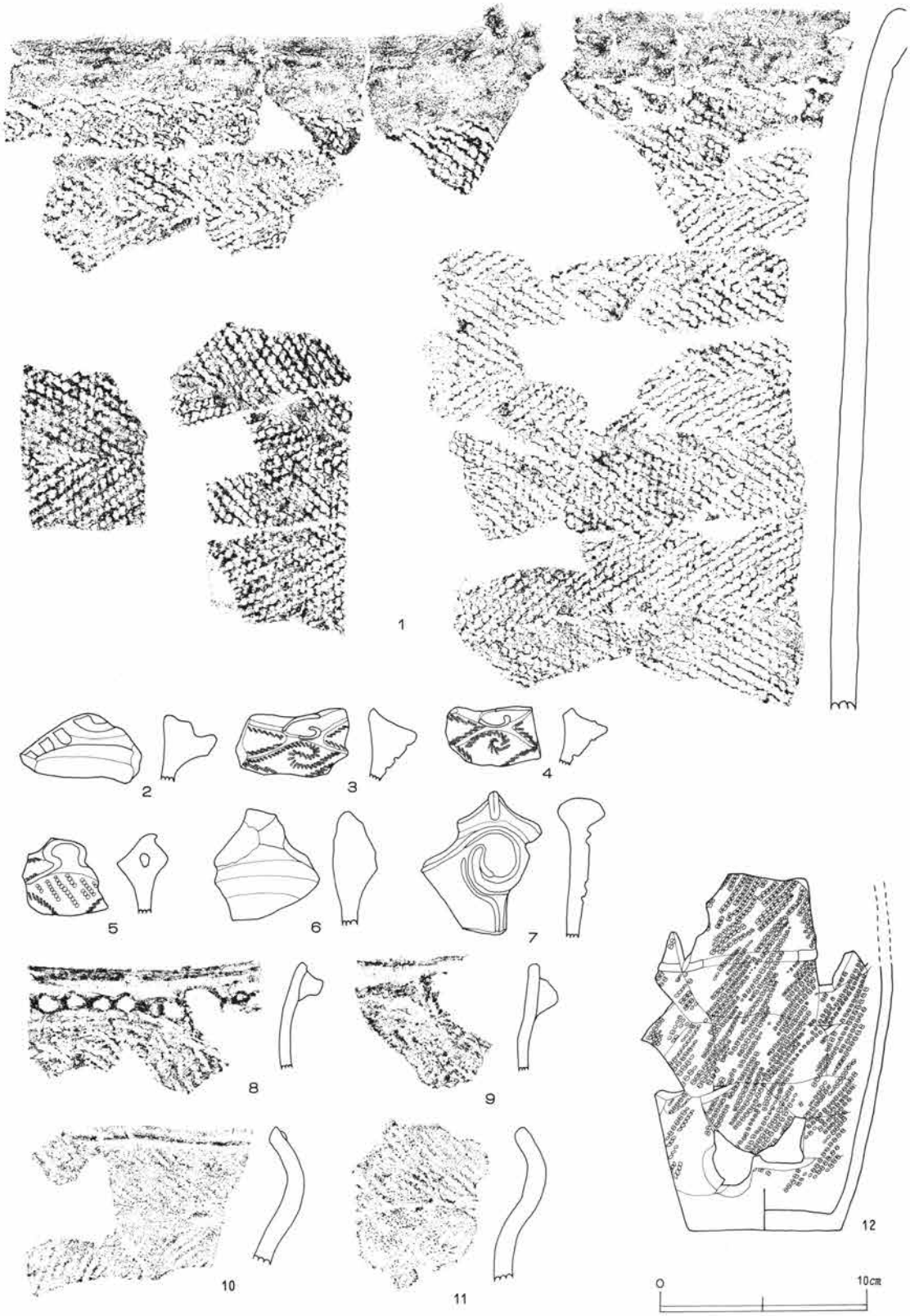
第23図19は底径 7.6 *cm*、底厚 1.1 *cm*を計る。砂粒を若干含み、赤褐色を呈し、無文、平底である。成形は円板状の底部と体部との接合方法であり、底辺部は横ナデに磨消しが施され若干張り出している。



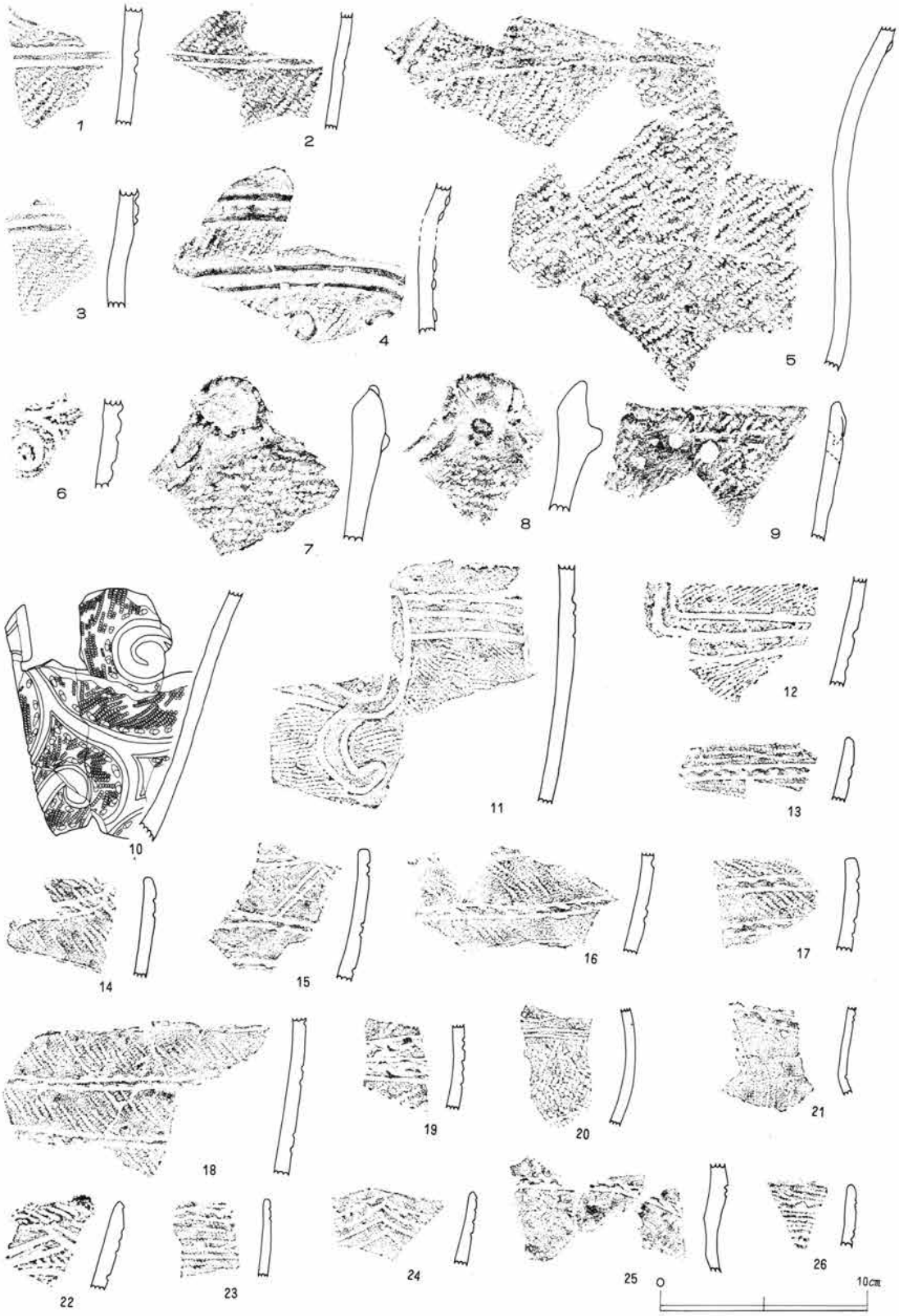
第19図 土器実測図(1)



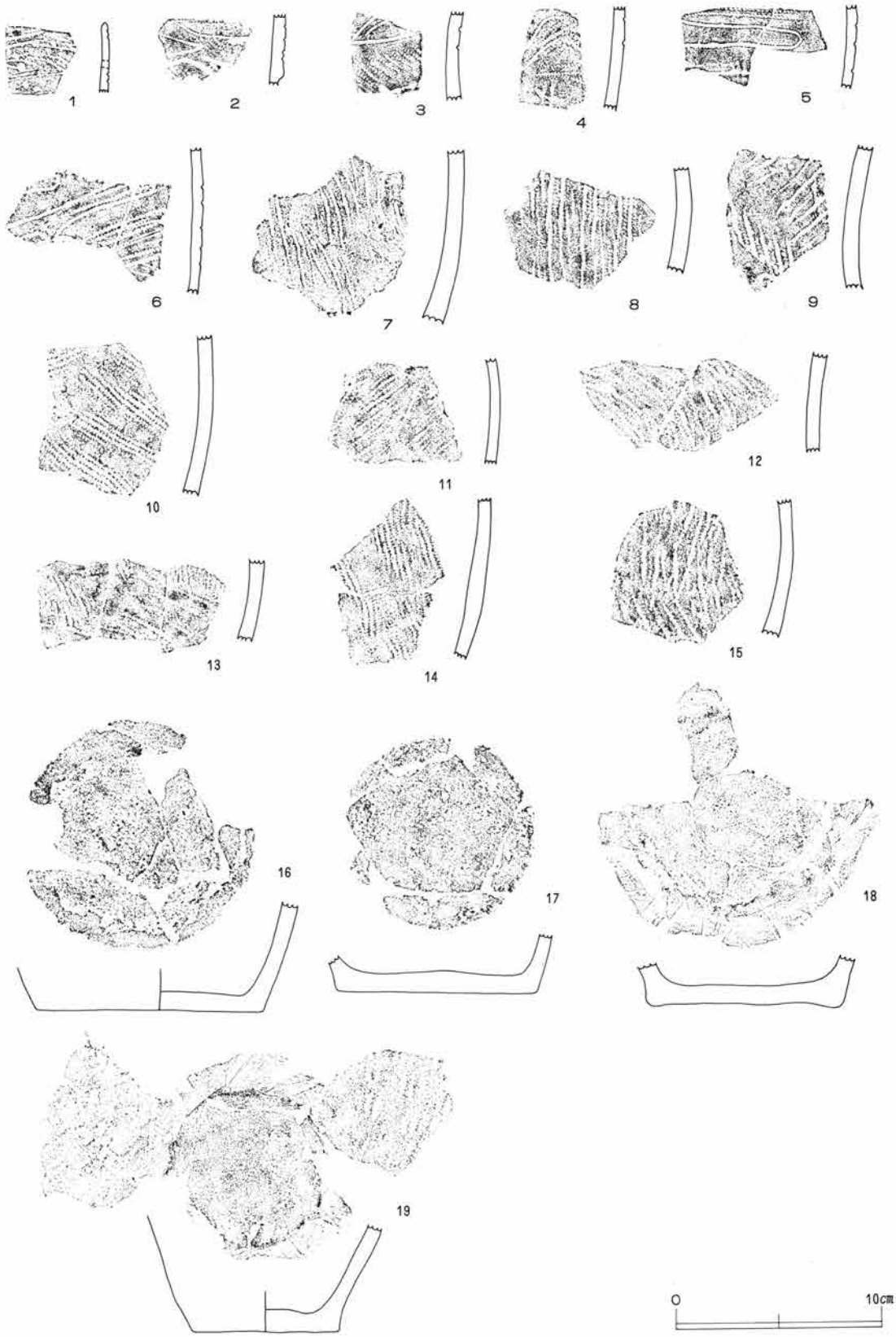
第20図 土器拓影図（1）



第21図 土器実測図（2） 拓影図（2）



第22図 土器実測図(3)土器拓影図(3)



第23図 土器拓影図(4)

8. 石　　器

本遺跡の発掘調査において出土した石器類は33点であり、その他大小の礫、剝片をあわせてダンボール1箱分出土した。

出土した石器類は、石鏃、削器、石槍、石匙、石斧、石球、石核、敲石などである。なお石器のおもなもの33点についての出土地区、層位、計測値、石質等は第3表に記載した。

(1) 石鏃（第25図1～17、図版21－6）

出土した石鏃は17点であり、形態上6類に分類される。

A；先端部から逆刺部に至る側縁が他の石鏃とは著しく異なり内彎孤をえがくタイプである。したがって逆刺部は強く張り出し茎部に至るまでが直線的な状態である。（1）

B；逆刺部から茎部に至るまでゆるやかな内彎孤をえがき、張り出しは弱い。（2・4・5）

C；無茎。茎部が内彎孤をえがくタイプである。表裏面とも細密に調整される例が多い。内彎孤がゆるやかである。（8・9・12・13・15）

D；逆刺部がなく、柳葉形を呈するタイプである。最大幅は中央部に位置し、細密な調整が施される例も多い。（3・6・7）

E；Cのタイプとは反対にゆるやかな外彎孤をえがくタイプである。（10・11・17）

F；三角形の両辺の底辺に近いところを、両側から深く欠きとって、あたかも凸字形の柄をつけたような形をつくる。（14）

以上の6類である。

1－有茎。断面は凸レンズ状を呈し、細密な調整剝離が表裏ともに施されている。先端部が欠損している。　2－有茎。断面は扁平を呈し、裏面部はネガティブ剝離面（註）が残っている。　3－有茎。断面は凸レンズ状を呈し、細密な調整剝離が表裏両面に施されている。茎部が欠損している。　4－有茎。断面は凸レンズ状を呈す。表裏両面に加工が施されているが、やや粗く、細密さはみられない。先端部が欠損している。　5－有茎。断面は凸レンズ状を呈す。茎部が欠損しているが、黒色の物質（アスファルト）が付着しているのが見られる。表裏両面に細密な調整剝離が施されている。　6－無茎。縦長の剝片を利用している。表面部には第一次剝離、側縁部分には細部加工がみられる。　7－無茎。裏面部にネガティブ剝離面が顕著にみられる。細部調整は側縁部分だけに施されている。　8－無茎。断面は凸レンズを呈す。細密な調整剝離が表裏両面に施され、また周縁部にも細かな調整が加えられている。　9－無茎。表面部には調整剝離がみられるが、裏面部の調整は粗い。断面は凸レンズ状を呈す。　10－無茎。表裏両面ともに細密な調整剝離が施されている。　11－無茎。表裏両面ともに細密な調整剝離が施されている。　12－無茎。先端部が欠損しているが、表裏両面ともに剝離面が若干残っている。　13－無茎。周縁部には細密な調整剝離がみられる。14－有茎。表裏両面に細密な調整剝離を施すとともに、基部の両側にノッチを入れて茎部を形成している。　15－無茎。断面は凸レンズ状を呈し、先端部が欠損している。表裏両面に細密な調整剝離が施されており、周縁部にも細かな加工が見られる。　16－下半分が欠損している。裏面部には細かな加工はされておらず、表面部のみに調整剝離が施されている。未

完成品であろうか。　17－無茎。表裏両面ともに第一次剝離面が残されている。調整剥離は周縁部のみにみられる。断面は扁平状を呈す。

(2)　削器（第25図18～20、図版21－6）

18－縦長剝片を利用し、周縁部のみに調整剥離が施されている。ポジティブ剝離面とネガティブ剝離面が残っている。刃部の作出は簡単である。　19－縦長剝片を利用し、刃部は周縁部に簡単に作出している。調整剝離はみられない。ポジティブ剝離面とネガティブ剝離面が若干残っている。　20－比較的厚い縦長剝片に数回の剝離を加えて刃部を形成する過程のものであろう。

(3)　石槍（第25図21、図版21－6）

21－有茎？。身部が外彎孤をえがきながら茎部に至るタイプであろうが、身部下部から欠損しているため不明である。表面部には一部ポジティブ剝離面を残してはいるが、全体に剝離を加え調整している。裏面部のネガティブ剝離面には第一次剝離が大きく残り、粗い調整が周縁部のみにみられる。

(4)　石匙（第25図22、図版21－6）

22－刃部の先端部が尖頭状に作出するタイプである。細密な調整は刃部を主としている。縦型石匙で両側にノッチを入れつまみを作出している。

(5)　石斧（第26図24～27、第27図32、図版22－7、23－8）

24～27はいずれも磨製石斧であり、擦痕は認められない。26は基部が破損している。32は未完成品であろう。

24－断面は扁平を呈す。表裏両面に右下がりの整形痕がみられるが、側面部には原石面が残る部分もある。また軽く研磨した面がある。胴部には粗い剝離が認められる。　25－両刃を有し断面は扁平を呈す。表裏両面ともに右下がりの整形痕がみられ、側面部には整形のために研磨されている。刃部には刃こぼれの跡がある。　26－両刃を有し、断面は扁平を呈す。表面部には右下がりの整形痕が認められるが、裏面部は刃部に研磨された痕跡が若干みられるだけで原石面を残している。刃部に刃こぼれの跡がみられる。　28－表裏両面および両側面部が良く研磨されている。長軸方向に整形痕が認められる。刃部は表裏両面から鋭く作出され「斜刃」の形状を呈している。

(6)　石球（第26図28～31、図版22－7）

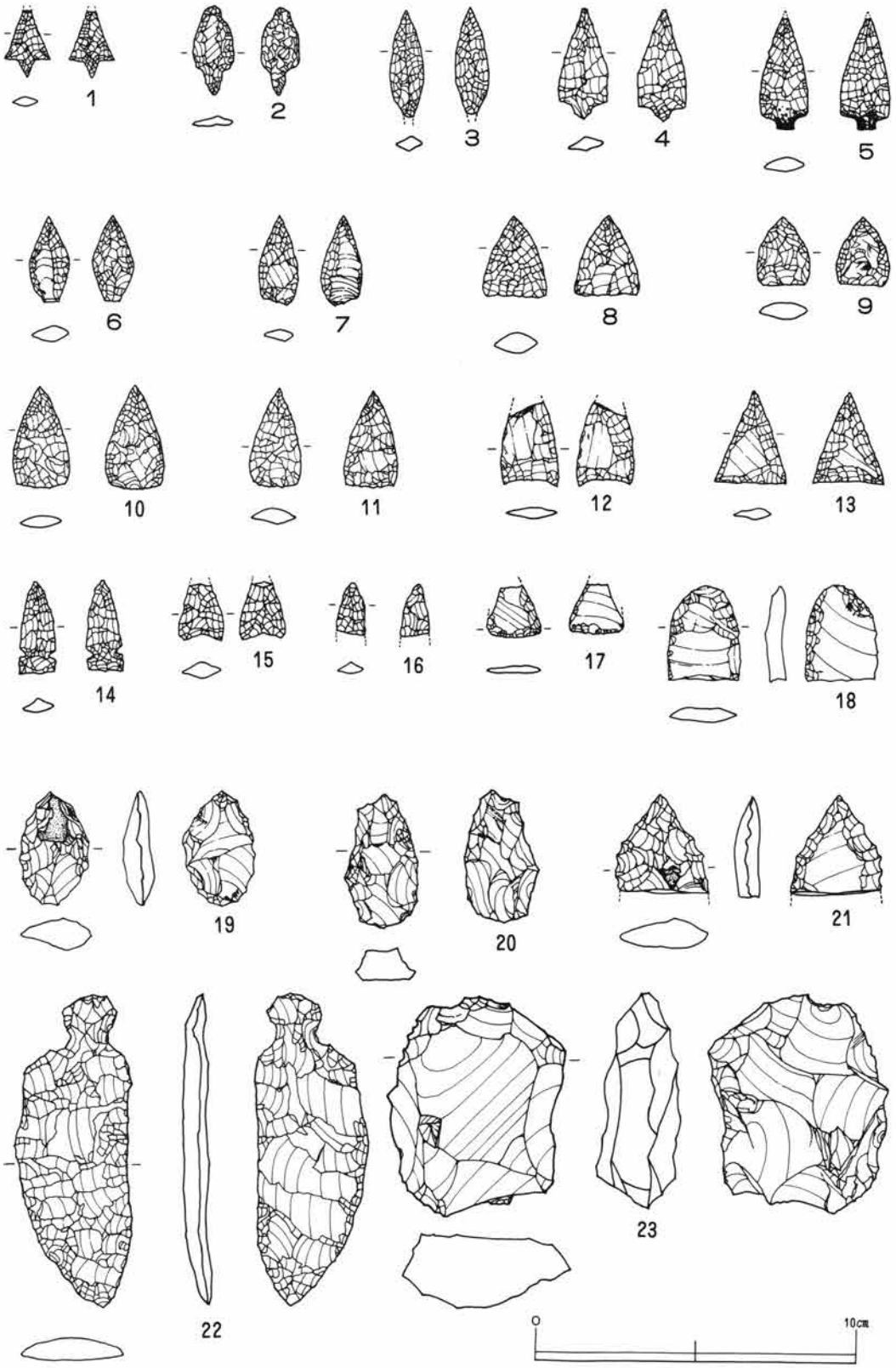
これまでの石弾、投弾の名称で呼ばれた石器ではあるが、その使用方法についてはいまだ確定的な論はみあたらない。本報告においては形状から石球の名称を用いたいと思う。確定的な人為的な加工の痕跡はないが、手ごろな拳大の自然礫を利用している。

(7)　敲石（第27図33、図版23－8）

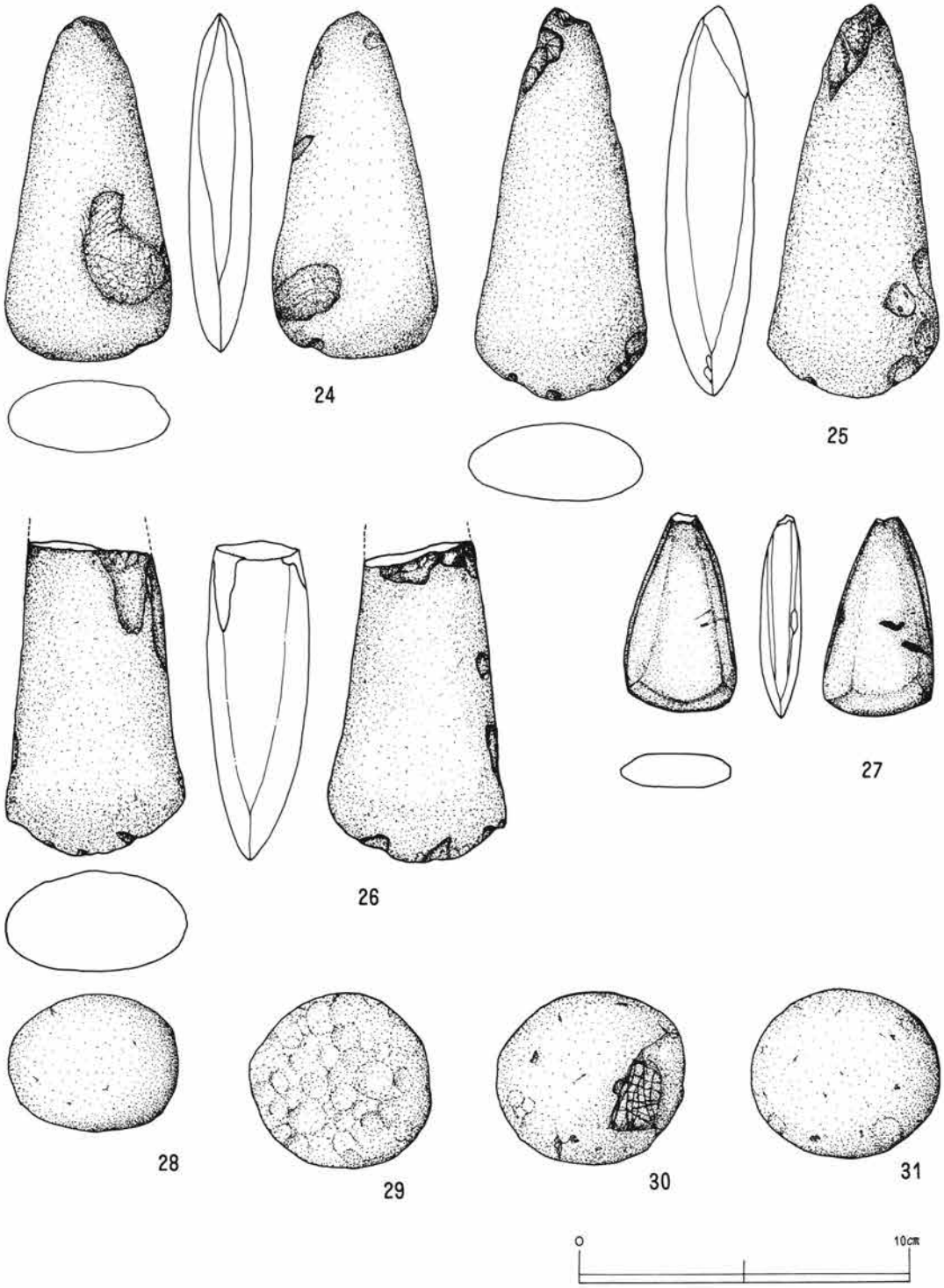
自然石を利用し、先端部には打撃によるとみられる破損面が若干存在している。

(8)　石核（第25図23、図版21－6）

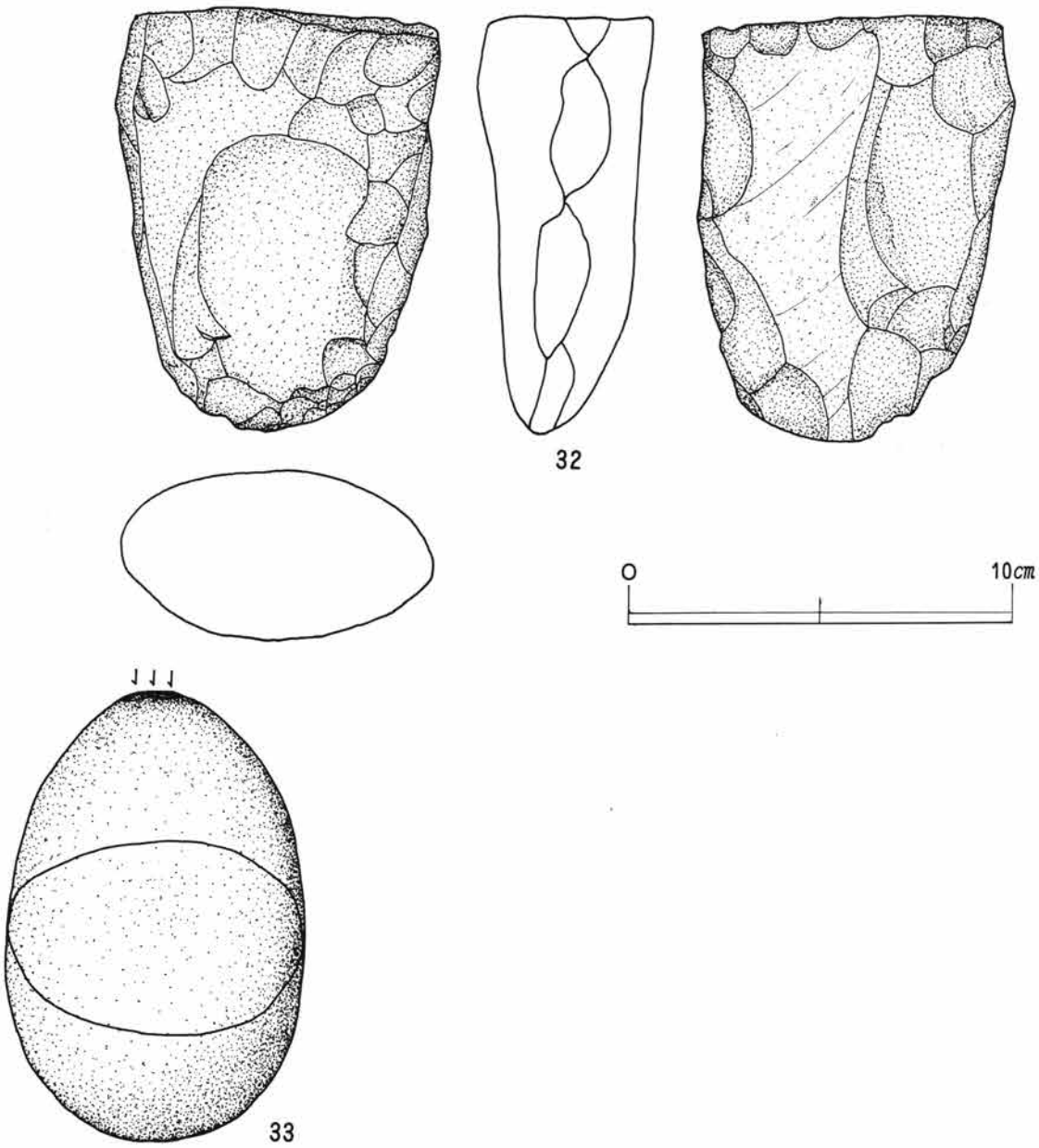
小形の石核で、ポジティブな剝離面が表面部にみられるが、剝離の規則性はみられない。



第24図 石器実測図(1)



第25図 石器実測図（2）



第26図 石器実測図(3)

No.	名称	出土区域	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考
1	石鏃	I－21	Ⅲ	21.5	14.6	3.3	0.6	珪質頁岩	有茎、先端部欠損
2	〃	L－11	Ⅲ	28.4	12.5	2.8	0.7	〃	〃
3	〃	J－11	Ⅲ	33.4	10.9	4.6	1.5	硬質砂岩	〃、茎部欠損
4	〃	Y－11	撹乱	35.1	15.4	4.7	2.1	珪質頁岩	〃、先端部欠損
5	〃	J－9	I	35.5	16.0	4.6	2.2	〃	〃、茎部欠損、アスファルト付着
6	〃	I－9	Ⅲ	27.0	13.5	5.0	1.6	〃	無茎
7	〃	J－16	Ⅲ	28.4	13.0	4.4	1.3	〃	〃
8	〃	I－10	Ⅲ	25.6	19.9	6.8	2.4	〃	〃
9	〃	Y－22トレンチ	I	21.8	16.9	5.2	1.7	〃	〃
10	〃	B－7	I	32.0	18.3	4.4	2.5	〃	〃
11	〃	R－8	Ⅲ	30.9	17.4	5.1	2.3	〃	〃
12	〃	B－7	I	26.6	18.3	3.3	1.7	硬質砂岩	〃、先端部欠損
13	〃	I－9	Ⅲ	28.9	22.7	3.9	1.8	珪質頁岩	〃
14	〃	K－11	I	29.4	12.4	4.8	1.4	〃	有茎、両端抉入り
15	〃	J－4	I	17.8	15.1	5.0	1.2	〃	無茎、先端部欠損
16	〃	K－11	I	16.8	9.8	3.8	0.3	流紋岩	未完成品、下半部欠損
17	〃	K－12	Ⅲ	16.1	17.0	2.1	0.7	頁岩	無茎
18	削器	I－9	I	30.0	23.9	16.1	4.7	凝灰岩	
19	〃	H－12	I	35.0	21.2	8.8	5.7	〃	
20	〃	H－17	I	41.6	23.9	12.6	10.8	〃	
21	石槍	I－15	I	30.8	27.4	8.4	6.8	〃	茎部欠損
22	石匙	I－10	Ⅲ	97.5	36.2	6.7	29.5	硬質頁岩	
23	石核	I－17	I	63.7	59.6	22.1	90.5	頁岩	
24	石斧	H－25	I	105.0	51.4	20.9	150	凝灰岩	磨製
25	〃	B－7	I	118.9	52.9	24.8	200	〃	〃
26	〃	T－6	Ⅲ	94.4	53.5	31.0	215	花崗片麻岩	〃、基部欠損
27	〃	I－14	Ⅲ	61.2	34.0	12.6	34.9	凝灰岩	〃
28	石球	L－12	Ⅲ	51.9	43.6	40.2	141	花崗岩	
29	〃	H－16	Ⅲ	57.9	57.4	55.8	255	閃緑岩	
30	〃	J－15	I	56.6	54.3	45.0	205	珪質頁岩	
31	〃	I－9	I	60.2	51.6	40.5	175	砂質頁岩	
32	石斧	H－13	I	111.3	76.6	35.1	575	凝灰岩	未完成品
33	敲石	O－14	I	118.9	81.2	62.6	901	花崗質砂岩	

第3表　石器計測値一覧表

ま　と　め

本遺跡の調査は70余日を要し、およそ2,800㎡の面積を発掘した。調査の結果、縄文時代の所産と考えられる土壙群を検出した。出土した遺物は縄文時代中期～後期および弥生時代の土器、石器類であり、ダンボール箱に約10箱分出土した。その中で土器類は縄文時代中期の円筒上層b～e式、大木7～8式土器を主体としている。

遺構は楕円形土壙3基、長楕円形土壙7基、不整形土壙1基の計11基が検出された。第2号楕円形土壙が谷の上端部で検出されたほかは、台地の平坦部で検出された。それぞれの形態、規模は第2表にまとめてある。

第1号楕円形土壙の覆土からは炭化物が検出されており、伴出遺物として縄文時代中期の円筒上層式土器の粗製土器が出土した。第2号楕円形土壙からは円筒上層C式土器がほぼ一個体分出土した。第1号、第2号楕円形土壙に関して、廃棄を目的とした捨穴的性格として遺構と土器を直接的に関連付ける事は難しい。

不整形土壙は形態および変則的な覆土堆積状態から見て、人工的所産とするだけの根拠に欠け、性格不明の落ち込みであるが、自然営力による痕跡と断定するだけの認識を持ち得ず、遺構の範疇に加えた。

長楕円形土壙と称した遺構は平面形態がほぼ葉巻状を呈し、規模は開口部長軸428～262㎝、短軸165～104㎝、確認面からの深さ108～160㎝を計る。短軸断面形はY字状ないし漏斗状を呈し、長軸底面は外側に張り出す特徴を持つ遺構である。同様な遺構の類例は溝状ピット、U字溝、Tピットなど異なった名称が用いられており、北海道、東北、関東の各地から検出されている。岩手県内では昭和48年、北上市相去遺跡において確認されて以来、約30遺跡300基におよぶ遺構が確認されている。内訳は東北縦貫自動車道関連遺跡（水沢市南矢中遺跡、紫波町宮手遺跡、滝沢村大久保遺跡・大緩遺跡・高柳遺跡）および北上市藤沢Ic・Id遺跡、都南村湯沢住宅団地遺跡などである。

県外では北海道函館市函館空港遺跡群（古泉弘1972・千代肇1975・石本省三・長谷部一弘・藤田登1975など）、同函館市西桔梗遺跡（千代肇編1974）、同札幌市S－153遺跡（内山真澄1975）、同乙部町元和遺跡（大沼忠春1976）、青森県千歳遺跡（北林八州晴1975）同新納屋(1)遺跡（杉山武・小笠原幸範1976）、埼玉県坂東山遺跡B地点（谷井彪・今泉泰之・宮崎朝雄1973）、神奈川県霧ケ丘遺跡（霧ケ丘調査団1973）など管見の範囲内で記してみた。以下報告例の特徴をまとめてみた。

1、台地縁辺の緩斜面および中央平坦部に群在し、等高線に平行し、ある程度の方向、間隔に規則性を有する場合と無秩序で散在する場合。

2、遺構からの伴出遺物は少なく、報告例では覆土上部からの出土が多い。（炭化物を検出した例がある；新納屋(1)遺跡第2号溝状ピットにおける底面直上の第7層。宮手遺跡BJ－53溝状ピットにおいては最下層より粒状の炭化物を検出。本遺跡第2号長楕円形土壙では覆土第4層より炭化材を検出。）

3、年代に関しては、判別のできる遺構との重複の類例があり（函館空港第4地点遺跡、

西桔梗E_1遺跡、S－153遺跡など）、元和遺跡では北海道内の類例より推測して、本州北部および北海道南部での円筒土器文化期に相当する縄文時代前期後葉～中期後葉の間に位置づけている。湯沢住宅団地遺跡では集落址との関連より推測して、縄文時代中期末葉～後期初頭よりあまり離れない時期の所産であると想定している。

4、長楕円形土壙の性格、用途に関して、今村啓爾氏は霧ケ丘遺跡の土壙群を検討し、陥穴という見解を述べている。また、函館空港遺跡群においてGトラップ（重力ワナ）としての可能性が論じられた。しかし本遺跡においては上記の遺跡で述べられた性格に準ずるだけの証左は持ち得ていない。ただ既成事実として、形態および構築に関し自然現象の痕跡ではない点と、用途に関連づけて、構築時に排される大量のロームを遺構付近に検出できなかった点、使用目的のためと推測されるある程度の方向性、規則性は確認された訳である。

今後、資料を再検討し、他分野の分析も併せ究明する必要がある。

本遺跡において出土した土器は、縄文時代中期前葉から後期中葉にかけての縄文式土器と弥生式土器である。中心となるのは円筒上層式土器群と大木式土器群である。円筒系の土器群については上層b式よりe式まで出土している。絶対量が不足しているため、その特徴は詳述できなかったが、b式と思われる土器は爪形撚糸圧痕文をメルクマールとし、c式は刺突文、d式は懸垂文と横方向への隆線、e式は懸垂文と沈線による横方向の展開を中心に考えている。

円筒土器は後の縄文時代晩期に繁栄する亀ケ岡式土器には及ばないにしても想像以上の範囲に広がっており、北は北海道の渡島半島、南は山形県北部と岩手県南部にまで広がって分布している。その文化は後に北進する大木系の強い影響を受け、円筒上層c式土器前後が最後の広範囲な分布を示し、上層d式を境として大木系の土器文化に移行していったと考えられるが、岩手県北部の場合、様相の変遷を明確に示す遺跡が少なく、推論の域を脱することができない。しかしながら本遺跡出土の土器は、岩手県内陸部の大木8式土器と強い斉一性が認められることは確かであり、鈴木克彦氏が提唱している大木系土器群を久慈市周辺まで下げて想定していることに若干の差異を感じる。従来から大木式土器は内陸部の中山峠を越えるよりも早く海岸部で円筒土器に接触したと言われている。本遺跡出土の大木8式土器に相当するものは青森県泉山遺跡などで出土しており、キャリパー形を呈し、大木系土器群の外反する口縁部を持つ土器とは差異が認められる。ただし、細部や把手などに円筒系土器の強い影響を残している土器もある。また円筒系土器には沈線で表現する手法が生まれる素地は見られず、所謂円筒上層e式土器の横方向への沈線文は既に大木系の土器の範疇とも考えられる。また、本遺跡で円筒上層c式に比定した第19図2の土器は極めて新しい様相を呈し器形は祖形のキャリパーとも思われ、内反する口縁部を持ち、論拠を発展させる良い事例となるであろう。

第22図10の後期中葉にみられる沈線に沿って刺突文を有する土器は、大槌町崎山弁天遺跡、花泉町貝鳥貝塚、大迫町立石遺跡などにみられるが、すべて破片であり、本遺跡でも口縁部を欠損しており、上半部の器形をつかむことができなかった。また単独で出土しており、それに伴う資料も認められなかった。

第Ⅳ群には弥生式土器を分類したが、本遺跡からは小破片のみの出土であり、十分な検討を加えることはできなかった。前述の浮線波状文は、特徴から福島県白河市天王山遺跡出土の土器を標式とする天王山式土器に該当するものと考えられ、時期はおよそ弥生時代後期とみられる。本報告では資料を呈するのみに留めておきたい。

本遺跡の石器類は他の遺跡の石器や土器に比べ、種的・量的共に少なく、また層位的にも把握することは土器と同じく難しい。本報告ではタイプ別に分類したが、タイムスケールは排して考えている。石器の組成を見ると8種類であり、一般的な縄文時代中期の石器組成から比べれば極めて少ない。しかしながら使用目的から考えてみれば、キャンプサイトなど特定の生活形態が組まれていたことが推測される。

また、石鏃の中に所謂「アメリカ式石鏃」が検出されている。層位的にはつかめないが、弥生式土器を出土した付近で検出されており、同時期の所産であるとみて良いであろう。

本遺跡は岩手県北部沿岸地域で、東北北半の円筒土器文化と、南半の大木式土器文化の接点であり、報告例が少ない中で、両文化の接触による特徴ある性格を示した遺跡であると言える。

参考文献

新谷　武 1976　青森県埋蔵文化財調査報告書　第30集　妻の神遺跡　青森県教育委員会

石本省三 1975　函館空港第4地点遺跡－1974年度発掘調査の概要－ 北海道考古学第11輯

市川金丸 1976　青森県埋蔵文化財調査報告書第31集　泉山遺跡発掘調査報告書　青森県教育委員会

今村啓爾 1976　縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較　物資文化27

内山真澄 1975　札幌市S－153遺跡の調査　考古学ジャーナル107

江坂輝彌 1970　石神遺跡

大沼忠春 1976　元和　乙部町教育委員会

北林八州晴 1976　青森県埋蔵文化財調査報告書第27集　千歳遺跡(13)発掘調査報告書　青森県教育委員会

霧ケ丘遺跡調査団 1973　霧ケ丘

草間俊一 1974　崎山弁天遺跡　岩手県大槌町教育委員会

古泉弘 1972　函館空港遺跡群第4地点第81・84号住居址の調査　先史8

児玉作左衛門 1958　サイベ沢遺跡－函館郊外桔梗村サイベ遺跡発掘調査報告書　市立函館博物館

寺社下博 1975　千葉・上之台遺跡第Ⅱ次調査概報　先史9

鈴木克彦 1975　中の平遺跡発掘調査報告書　青森県教育委員会

鈴木克彦 1976　東北地方北部における大木系土器文化の編年的考察　北奥古代文化第8号

谷井彪 1973　埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集　坂東山　埼玉県教育委員会

千代肇 1974　西桔梗－函館園流通センター建設用地内遺跡調査報告書　函館圏開発事業団

千代肇 1975　函館空港第4地点遺跡　考古学ジャーナル105

杉山武 1976　青森県埋蔵文化財調査報告書第28集　むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報　青森県教育委員会

能登健 1974　発掘調査と遺跡の考察－いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として－信濃第26巻

第９号
林謙作 1965　縄文文化の発展と地域性－東北－日本の考古学Ⅱ
堀越正行 1975　小竪穴考(1)　史館第５号
村越潔 1970　円筒土器の分布　考古学ジャーナル43
村越潔 1974　円筒土器文化
岩手県史第１巻 1960
水沢市史第１巻 1974
その他

※第２号長楕円形土壙（第４層）出土の炭化材の年代測定は日本アイソトープ協会に依頼中である。

あとがき

本遺跡の調査および報告書の刊行にあたり、数多くの方々のお力添えがあった。調査に際し、国生尚、及川洵（岩手県教育委員会文化課）、小田野哲憲（岩手県教育委員会・博物館開設準備室）、中村良幸（大迫町教育委員会埋蔵文化財調査員）、村田良介（駒沢大学大学院）、小笠原武ほか久慈市文化財保護調査委員の各氏に御指導、御助言を賜わった。

また、現地では地元有志の方々に長期間にわたり発掘調査に従事して頂いた。

厚く御礼申し上げる次第である。

久慈市文化財調査報告書第2集(三崎Ⅲ遺跡)補遺

第2号変楕円形土壙（第4層）出土の炭化材の年代測定結果報告

C－14年代

2930±65 Y．B．P．（2850±65 Y．B．P）

年代は ^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B．P．）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95％となります。なお、^{14}C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

測定は、社団法人　日本アイソトープ協会

※　標記報告書（昭和53年3月発行）の末尾に貼付し補完して下さい。

遺跡遠景

遺跡近景（南より）

図版 1

遺跡近景（西より）

遺跡近景（東より）

図版２

調査進行状況(北西側)

調査進行状況(南側)

図版3

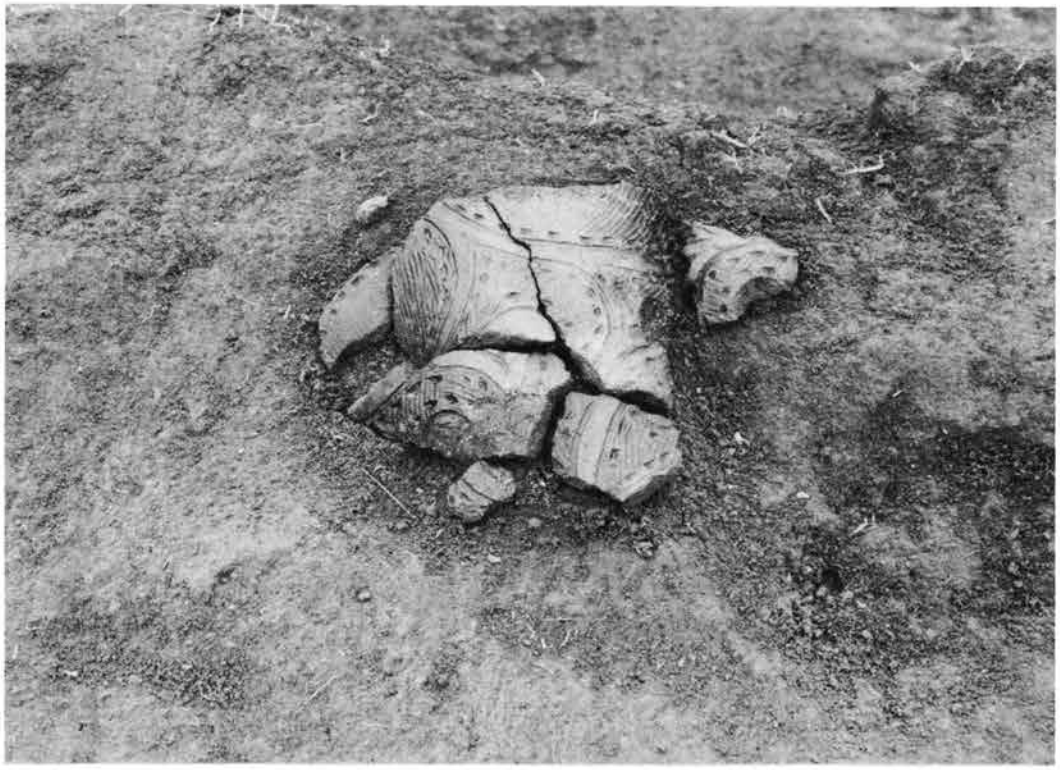
Ⅰ-14区石斧出土状況

Ⅰ-16区遺物出土状況

Ⅰ-27区遺物出土状況

図版5

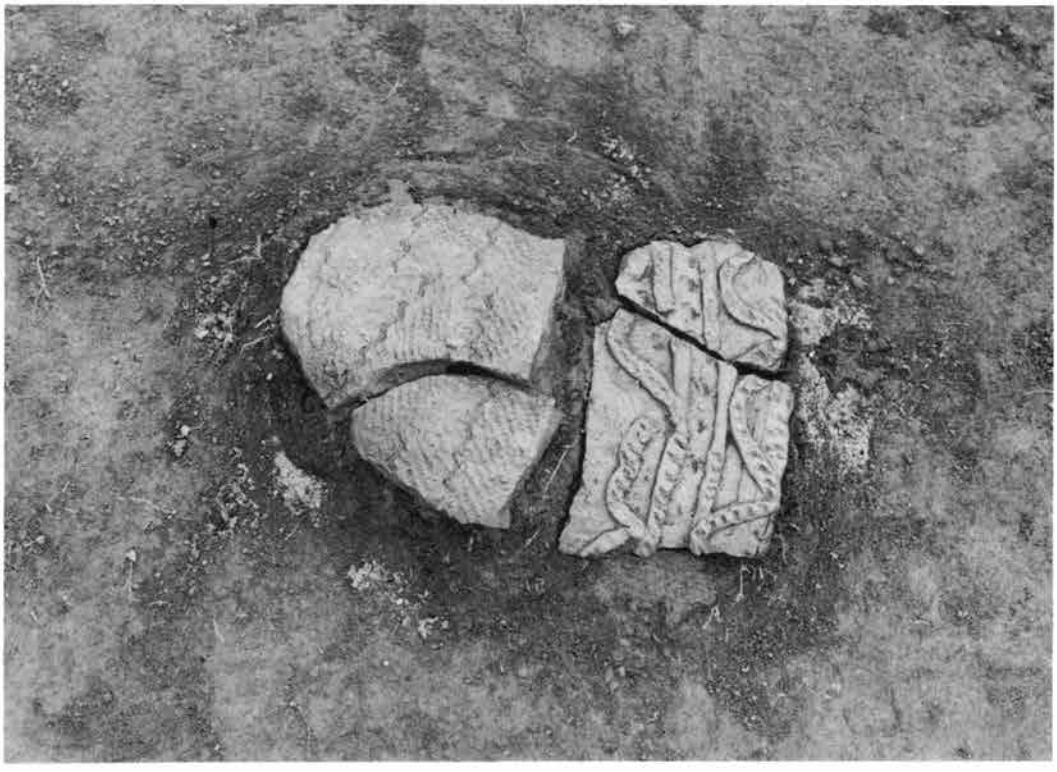
K-12区遺物出土状況



K-16区遺物出土状況

図版6

H-15区遺物出土状況

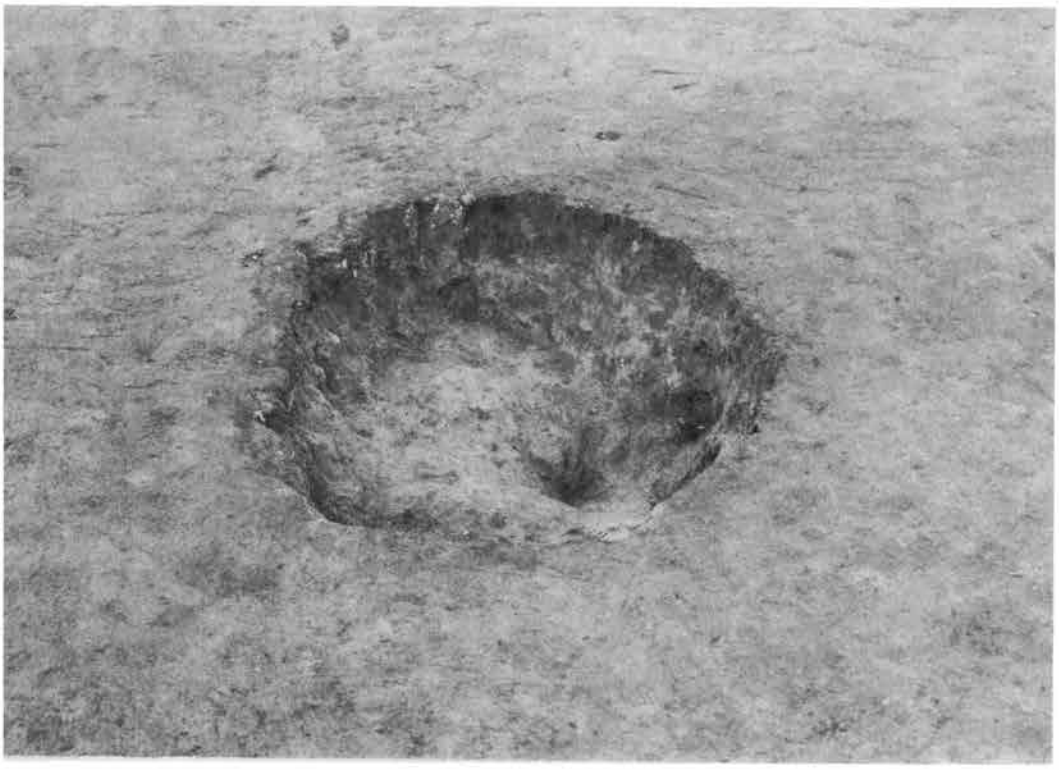


S-7区遺物出土状況

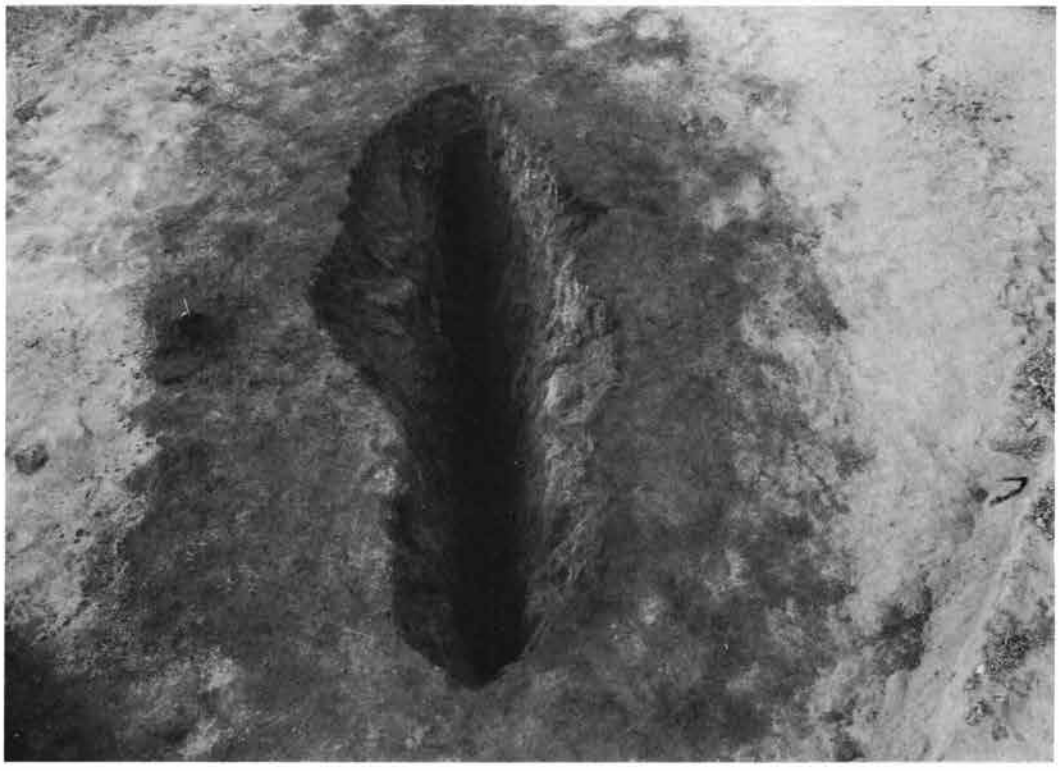
図版7

第１号楕円形土壙

第２号楕円形土壙



第３号楕円形土壙



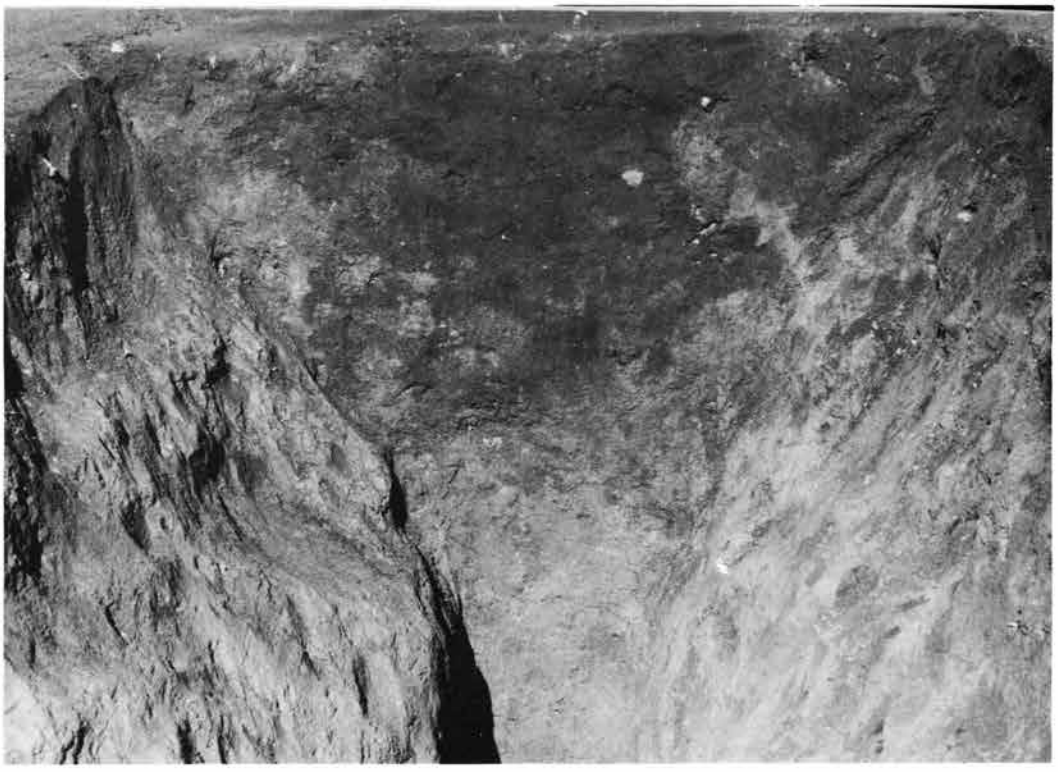
第１号長楕円形土壙

図版９

上 第２号長楕円形土壙炭化材出土状況(第４層)
右 第２号長楕円形土壙

第３号長楕円形土壙

第４号長楕円形土壙



第４号長楕円形土壙断面

図版11

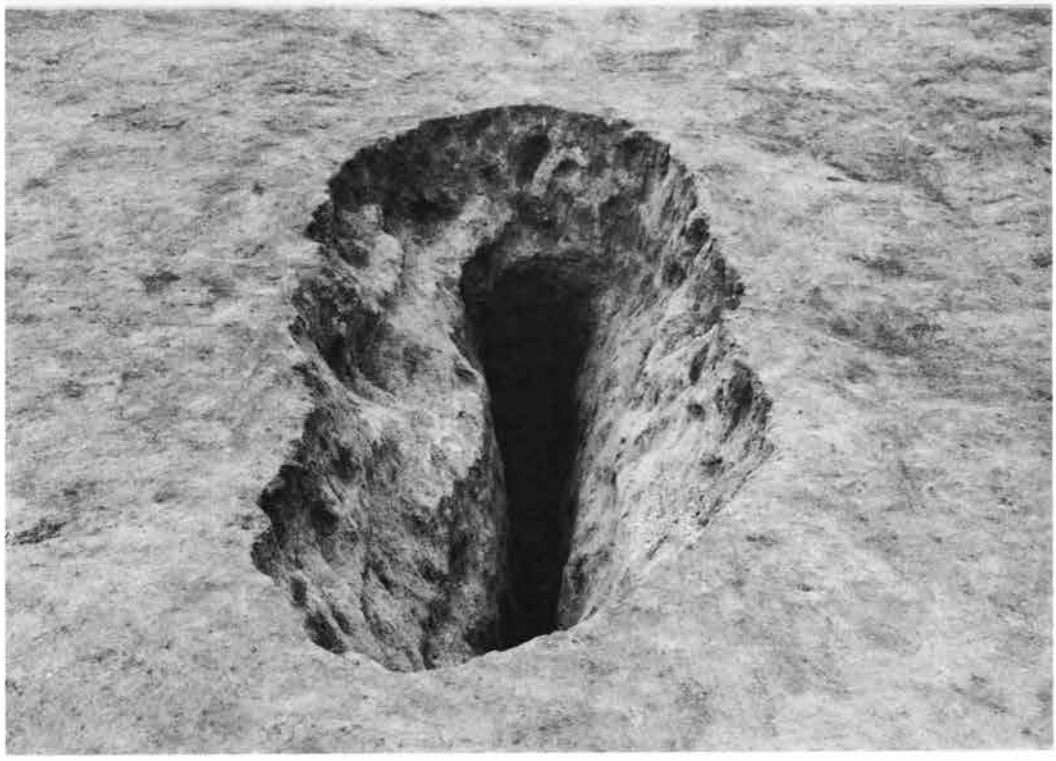
第５号長楕円形土壙確認面

第５号長楕円形土壙

遺構検出状態（第5号長楕円形土壙・不整形土壙）

図版12

作業状況



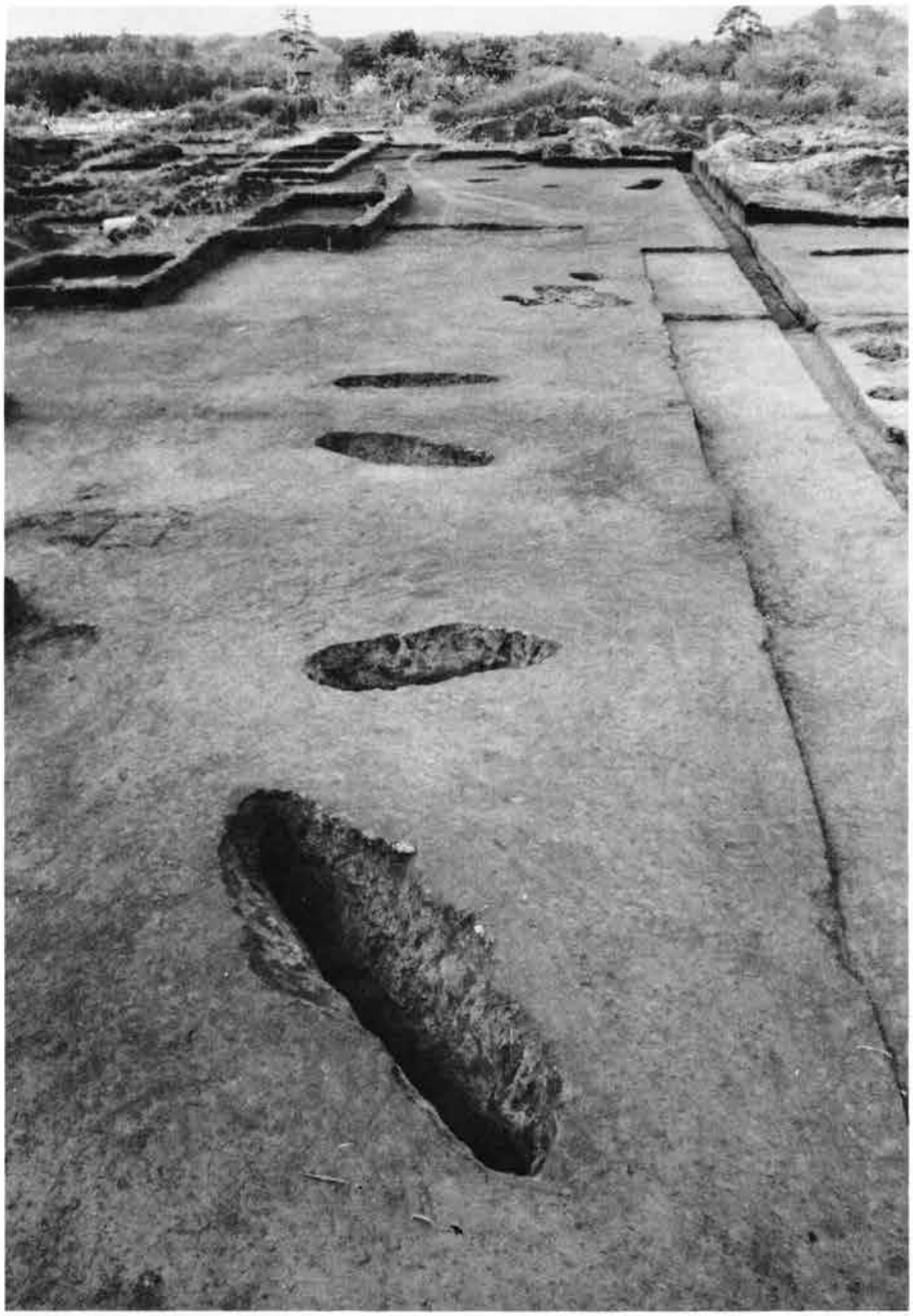
第６号長楕円形土壙

図版13

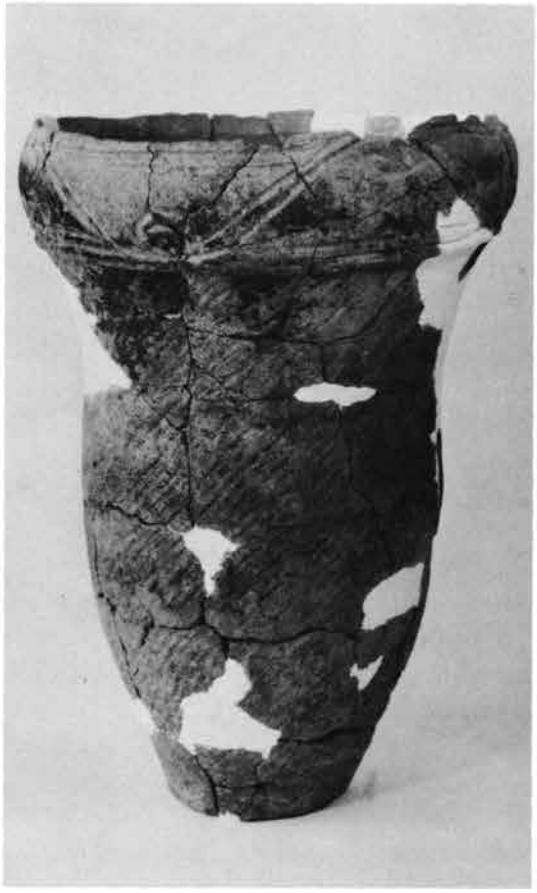
第７号長楕円形土壙

不整形土壙

図版14

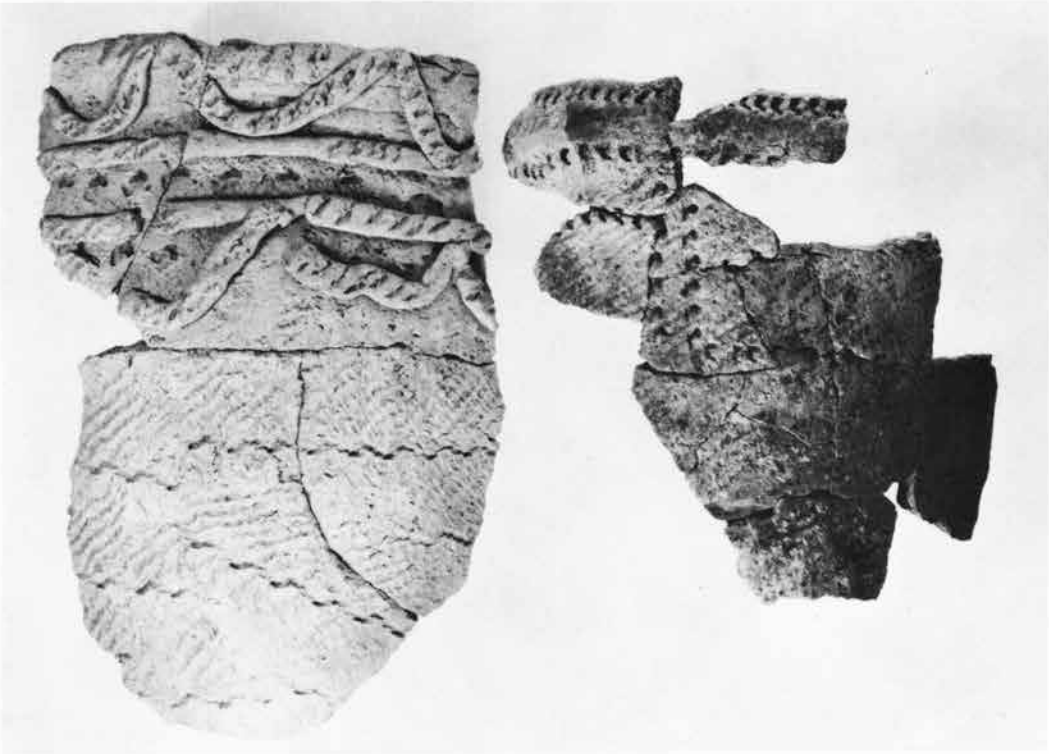


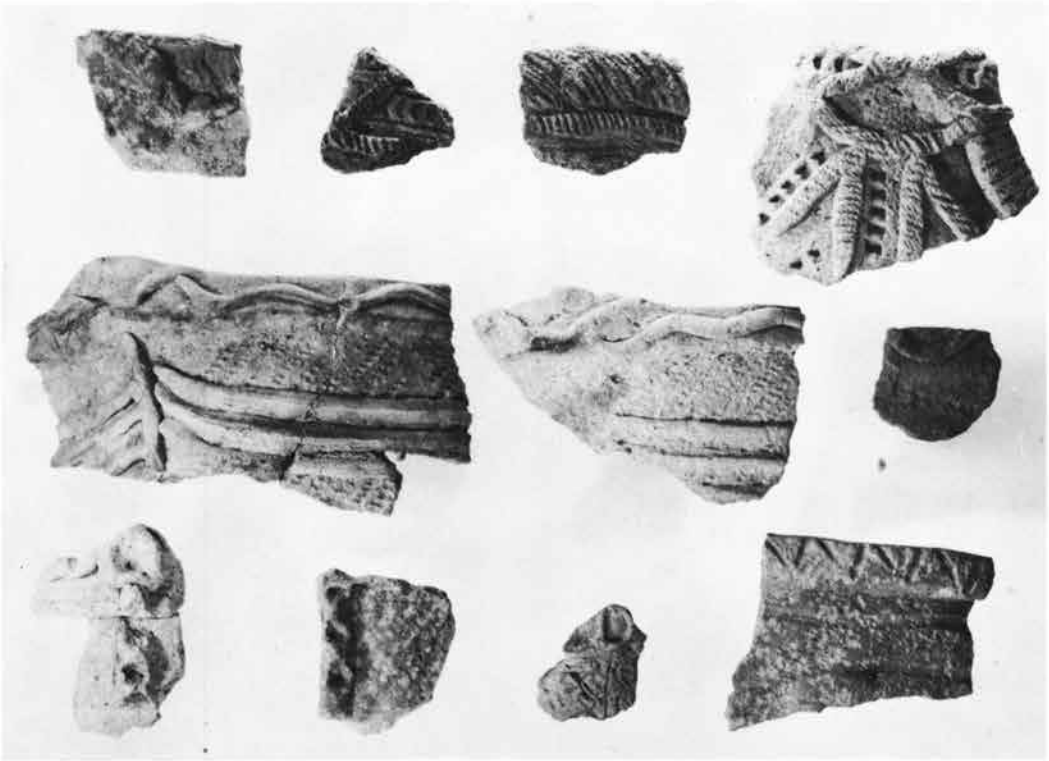
遺構全景



出土遺物(1)土器

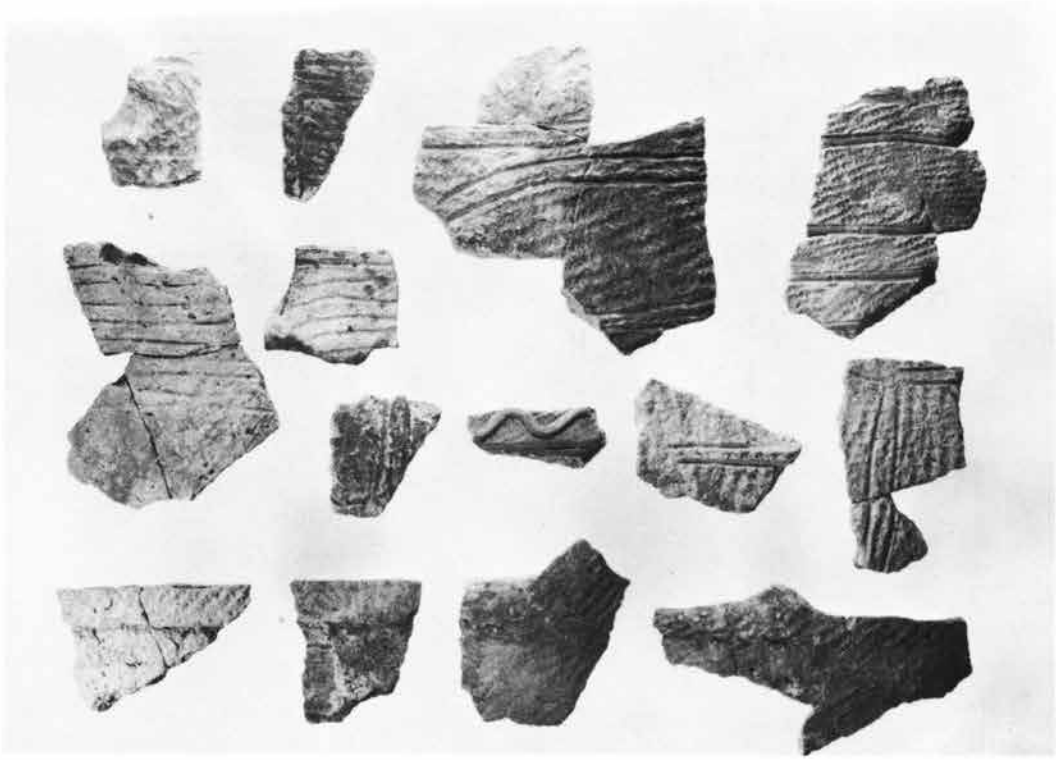
図版16

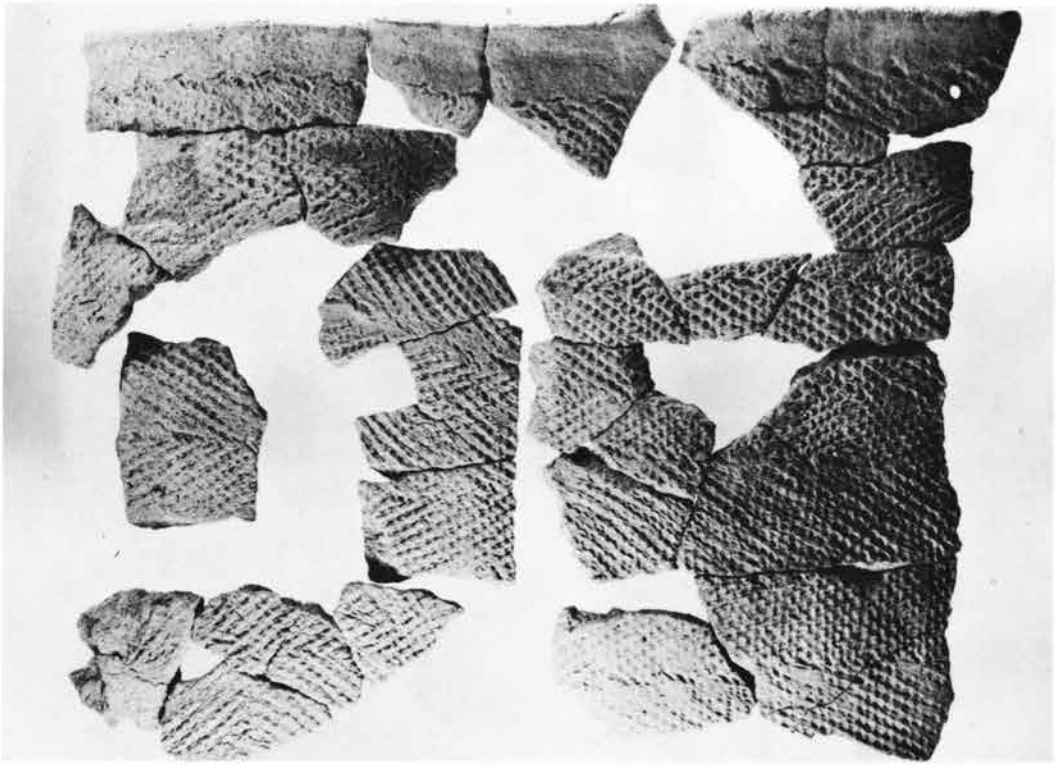




出土遺物(2)土器

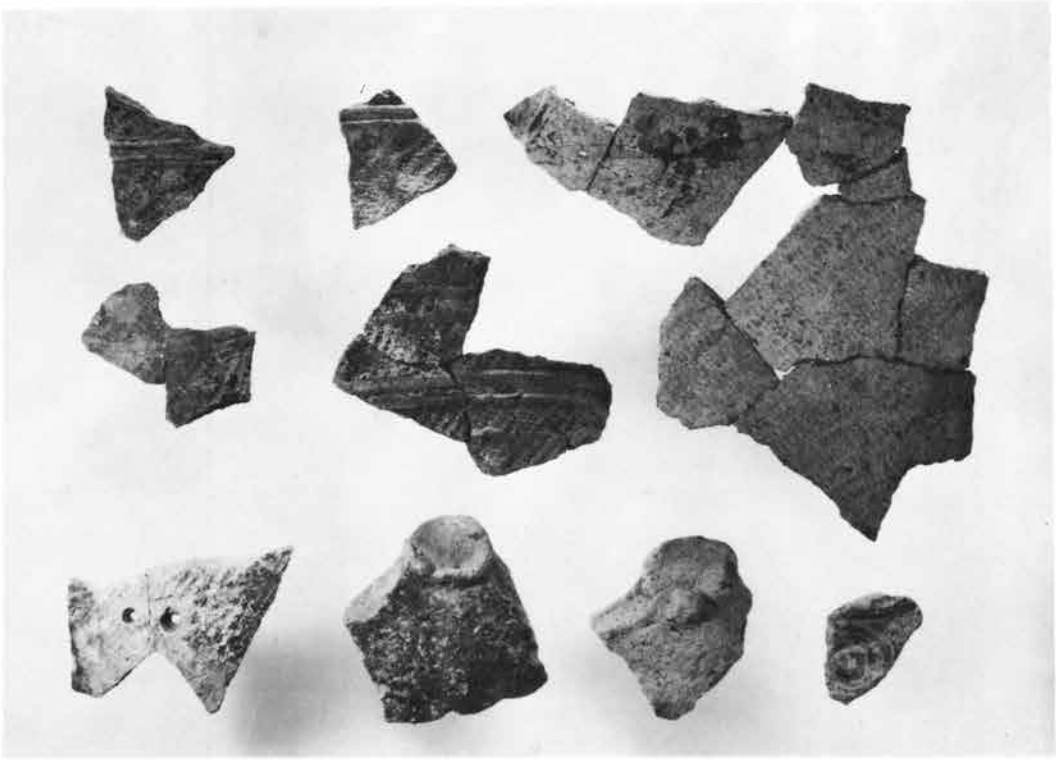
図版17

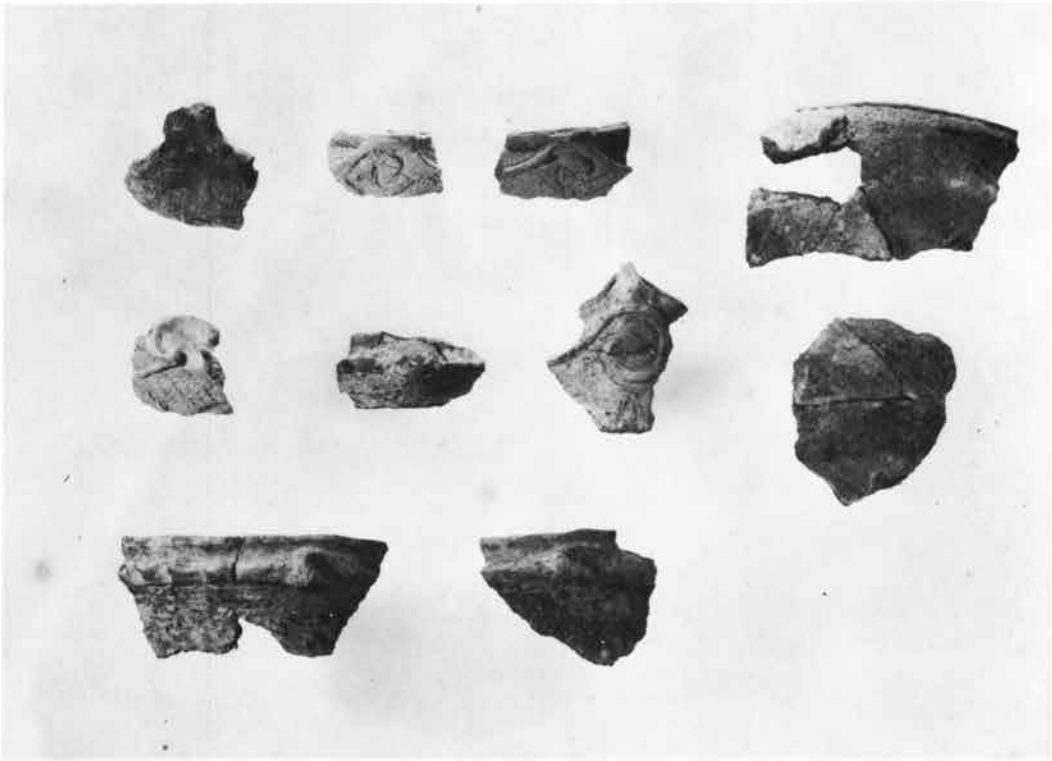




出土遺物(3)土器

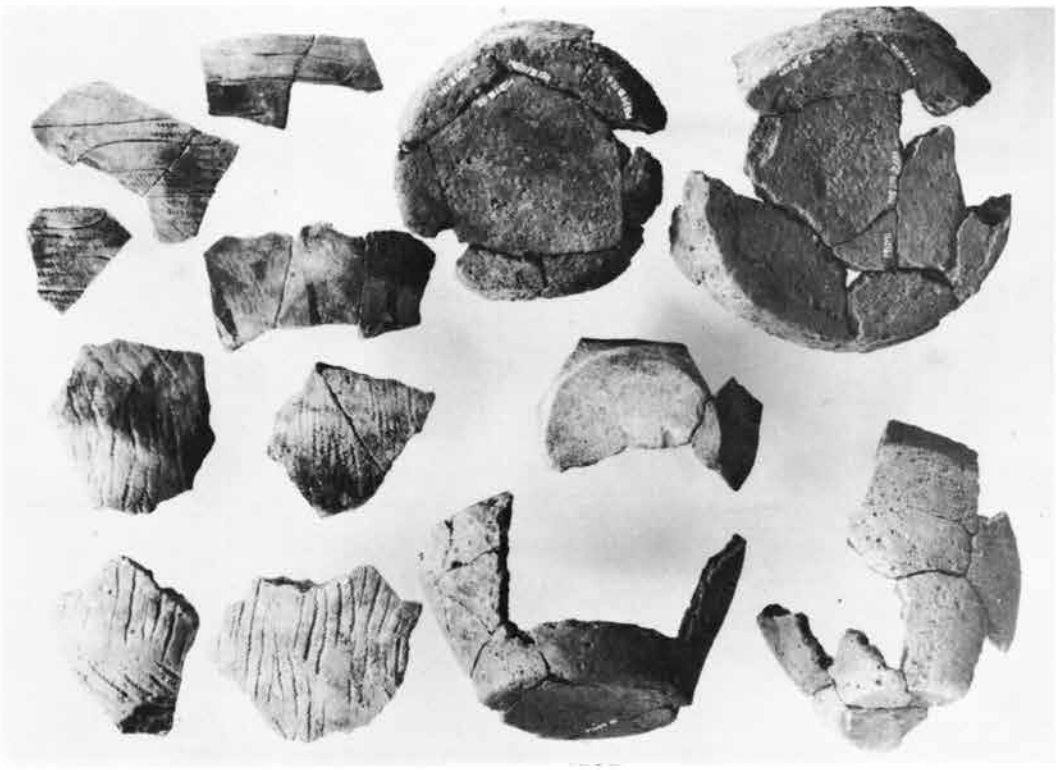
図版18





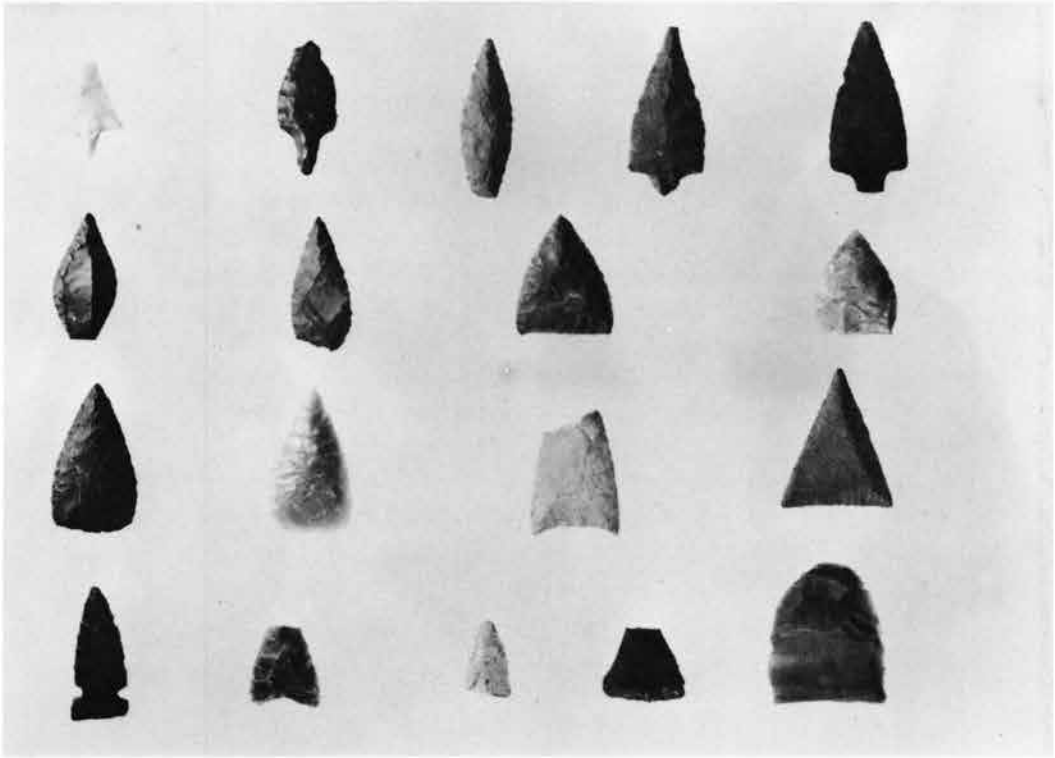
出土遺物(4)土器

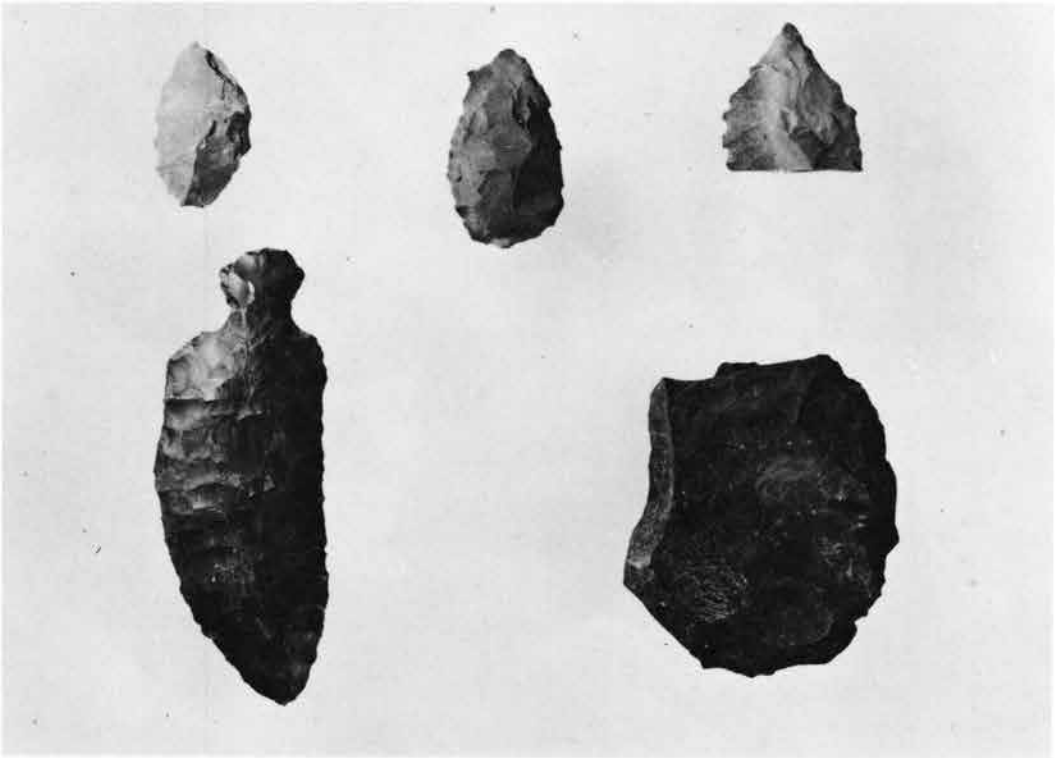
図版19



出土遺物(5)土器

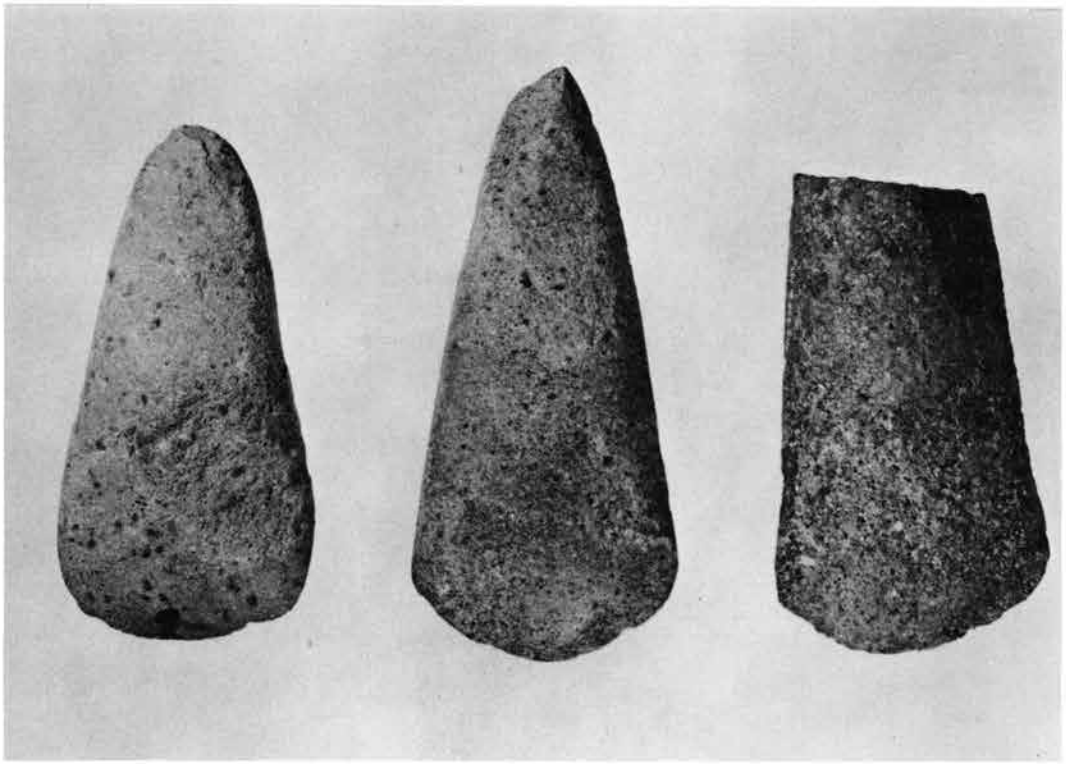
図版20

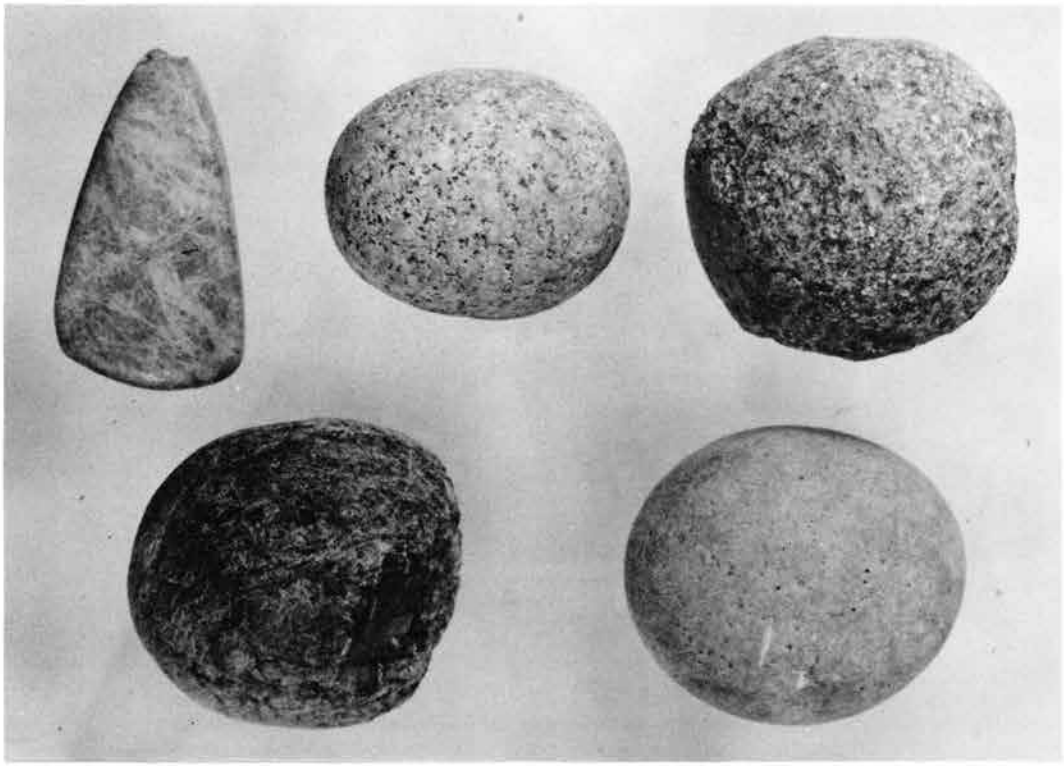




出土遺物(6)石器

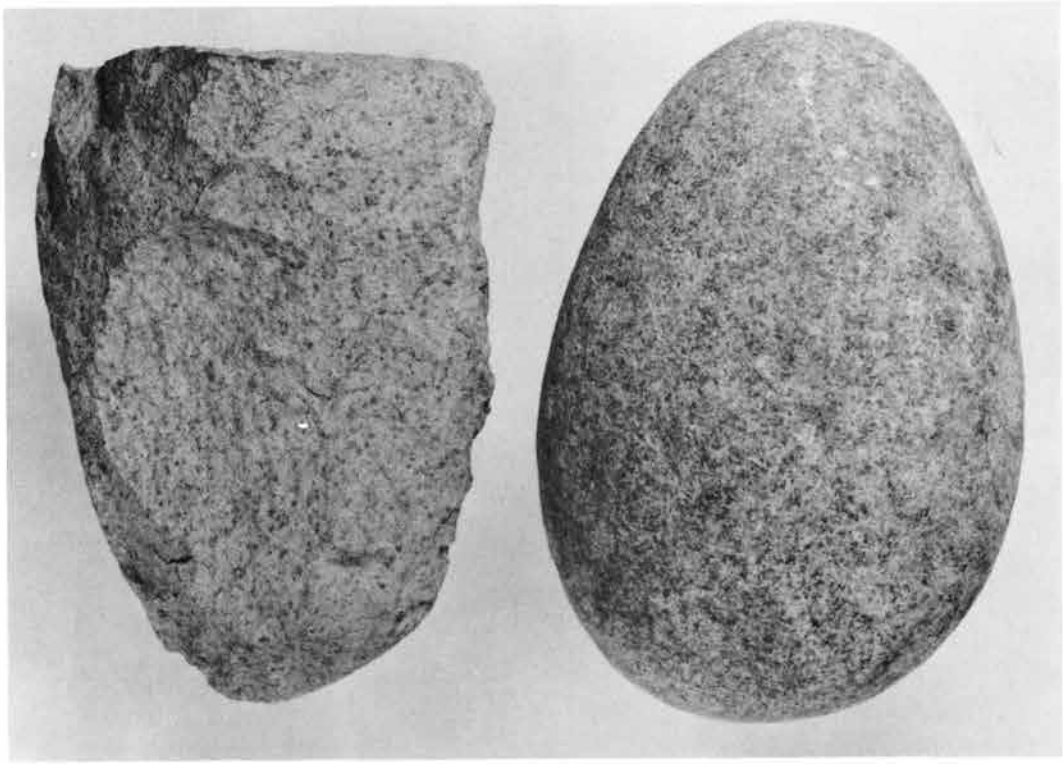
図版21





出土遺物(7)石器

図版22



出土遺物(8)石器

久慈市文化財調査報告書第２集

三崎(III)遺跡発掘調査報告書

印刷発行　昭和53年３月31日

編　　集　久慈市教育委員会

久慈市川崎町３－８－１

印　　刷　九　戸　活　版